

# 健康の大切さを実感する子どもを育てる保健領域の学習指導

～知識の活用を位置付けた学習活動の工夫を通して～

粕屋町立粕屋中央小学校 教諭 中村 剛

## I 主題設定の理由

### 1 社会の要請と子どもの現状から

現在の日本において、三大死因となっているのが癌、心疾患、脳卒中である。これらの病気は、長い年月にわたる不適切な食事・運動・休養や喫煙・飲酒などの日常的な生活の習慣が深くかかわっている。また、生活習慣が基になって起こる病気の発生は、成人だけの問題ではなくなっている。文部科学省「学校保健統計調査報告書(平成 22 年度)」からは、肥満傾向にある 11 歳児童は男子で約 11%、女子で約 9% と高い水準であることが分かる。このように日常の生活習慣は、子どもの健康にもつながっており、生活習慣病を予防していくことができる基礎を培うことが求められている。また、文部科学省「心の健康と生活習慣に関する指導(平成 15 年 3 月)」によると「急におこったり、泣いたり、うれしくなったりする」「わたしはおこりっぽい」とする質問に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答した小学 6 年生児童は男女ともに 50%を超えており、小学校の児童においても不安やストレスを抱えているという状況がある。そのため、不安や悩みを適切に対処したりする力をはぐくむことも重要視されている。これらのことから、自らの健康について振り返り、日常の生活習慣を改善したり不安や悩みへ適切に対処したりすることの大切さを実感させようとする本研究を行うことは意義があることだと考える。

### 2 学習指導要領体育科改訂の趣旨から

今回の学習指導要領改訂では、小、中、高等学校を通じて系統性のある指導ができるように内容が明確になり整理されている。例えば、高等学校の「現代社会と健康」の内容には、小学校の「毎日の生活と健康」「育ちゆく体とわたし」「心の健康」「けがの防止」の内容が発展して含まれている。また、小学校の段階では実践的な理解が、中学校では科学的な理解が、高等学校では総合的な理解が求められているように、発達の段階に応じた指導を行うことが必要である。小学校での実践的な理解が中学校での科学的な理解の基礎となり、それが高等学校での総合的な理解へと発展していく。この 12 年間の体系化された指導を通して、健康を自らの手でコントロールしていこうとするヘルスプロモーションの考え方の基礎を培うことができると考える。このことから、健康の大切さを実感させることで保健学習の基礎・基本を培おうとする本研究を行うことは、生涯にわたって健康を保持増進する子どもを育成する上でも意義のあることだと考える。

### 3 子どもの実態と共通テーマ「考えを広げ深める体育科・保健体育科学習指導」から

本校の第 5 学年の児童 36 名に対して保健の学習に対する意識調査を行った。その結果を見ると 98% の児童が「保健の学習は大切である」、83% の児童が「保健の学習は役に立つ」と回答している。しかし、「保健の学習をもっとしたい」「楽しみにしている」と感じている児童は 30%程度である。さらに、「質問したり調べたりしている」と回答した児童は約 44%であり、主体的に学習をした経験が少ないことがうかがわれる。これらのことから、保健の学習は大切であり役に立つとは感じているが、主体的に意欲が高い状

態で学習に取り組んでいるとは言い難い実態であった。そこで、本研究では、**児童の身近な経験や既有知識を活用**することで、自分と健康・安全に関する内容との関係を明らかにし、保健学習への意欲の高まりを目指す。また、長期派遣研修員の共通テーマ「運動や健康に関する考えを広げ深める体育科・保健体育科学習指導」では、子どもがもっている健康・安全についての見方や考え方をとらえ直すことを目指している。本研究では、子どもが既有知識を活用することで新たな知識を習得したり、習得した知識を活用することで、健康に関する見方や考え方を広げたりすることができ、そのことが健康の大切さを実感することにつながると考え、本主題、副主題を設定した。

## II 主題の意味

### 1 「健康の大切さを実感する子どもを育てる保健領域の学習指導」とは

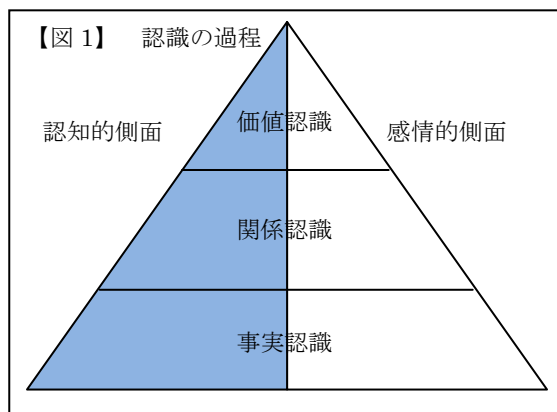
#### (1) 「健康の大切さ」について

世界保健機構は健康を「単に病気や虚弱が存在しないというだけでなく、肉体的にも精神的にもまた社会的にも完全に良好な状態である。」(1946)としている。このことから、本研究では「体が違和感なく快の感情で運動や日々の生活を送れる状態であること」を健康とする。また、小学校学習指導要領解説体育編(H20.8)では、「心や体が健康であることは、人とかかわりながら明るく充実した毎日の生活を送れることにつながり」とある。このことは、健康で過ごすことは社会や人とかかわりながら生活することの基盤となることを示している。これらのことから、本研究では、「違和感なく快の感情で運動や日々の生活を送ることができ、周囲のものごとに対して進んで働きかけようとする心や体の状態」を健康とし、それは、「充実した生活を送るための源でありかけがえのないもの」ととらえる。

#### (2) 「実感する」とは

健康を認知的側面からも感情的側面からもとらえ直し、認識を価値認識へと変容することである。

広辞苑によると、実感は「実物に接して起こる感じ」とある。本研究でいう実物とは健康・安全についての学習内容である。学習内容に触れることで、「健康をかけがえのないものである」ととらえることを目指している。健康をかけがえのないものととらえるには、子どもがすでにもっている健康に対する見方や考え方をとらえ直させる必要がある。そこで、「実感する」ことを「認識を変容すること」ととらえる。認識について、「人間の認識活動は、対象の客観的な属性などの認識(狭義の認識、認知的側面)と、対象の自分にとっての意味の認識(感情的側面)を同時に行う。(往野好久 2010年11月)」とあるように、子どもは学習したことを理解すると同時にそれが自分にとってどのような価値があるのかを理解する。また、認識の過程として事実認識、関係認識、価値認識がある。事実認識は対象を単一なものとしてとらえることであり、その事実認識で得たものを関係付けることで関係認識となる。さらに、関係認識された対象が自分にとってどのような価値があるのかを認識することで、価値認識となる。これらを基に認識の



過程について【図1】のようにとらえ、その姿を【表1】のように整理した。健康についての認識の高まりは、例えば「インフルエンザというのはこういうものである。」という事実認識から「インフルエンザウイルスは空気が乾燥した状態では増加しやすい。」というウイルスと空気を関係付けた関係認識へ高まり、そして「ウイルスは乾燥していると増えるのでインフルエンザにならないように加湿しよう。」という自分にとってどのような意味があるのかという価値認識へ高まる。価値認識へ高まった姿には、対象にかかわろうとする姿や自己の行動を変容させていこうとする感情的側面での意欲が表れると考える。子どもは、これまでの生活経験の中から健康に対しての認識をつくっている。「健康は大切である。」とい

	認知的側面の姿	感情的側面の姿
事実認識	対象をものの名称や意味など単一なものとしてとらえること。	喜怒哀楽のように単純である。
関係認識	事実認識で得られたもの同士を関係付けて対象としてとらえること。	「なるほど」という納得を伴うものである。
価値認識	認識の対象が自分にとってどのような意味があるのかといった自分との関係性までとらえること。	納得が深まり対象や自己に働きかけようとする意欲を伴う。

う認知的側面からの認識であったり、「けがをすると痛い。」といった感情的側面からの認識であったりする。これらの認識は主に生活経験から生まれたものであるため主観的である場合が多く、事実認識や関係認識で留まっている場合が多い。また、認知的側面での認識は高まっているが感情的側面での認識が不十分である場合も多い。そこで、本研究では子どもが健康について、認知的側面と感情的側面の両面とも価値認識でとらえることを「実感する」ととらえる。

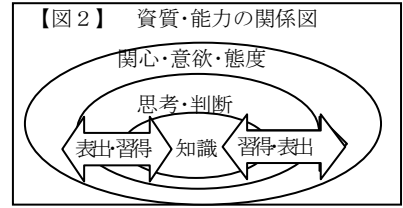
### (3) 「健康の大切さを実感する子ども」とは

健康を自分との関係でどのような意味があるのかを理解し、保健領域の学習に価値を感じ、主体的に学習に参加することができる子どもである。

認識には認知的側面と感情的側面がある。**認知的側面からの認識の結果は主に知識となり、感情的側面からの認識の結果は主に学習への意欲や態度**として表れる。感情的側面での認識の結果である学習への「関心・意欲・態度」は、子どもが学習内容とのかかわりの中で感じる「こうすればできそうだ」「分かりそうだ」「あ、そうか」という見通しをもつことと、**学習した内容の価値を感じる**ことによって高まっていく。また、認知的側面での認識を高めるためには対象を関係付ける思考力等が必要である。そこで、健康の大切さを実感するための資質・能力を「知識」「思考・判断」「関心・意欲・態度」ととらえ、目指す子どもの姿を【表2】のように考える。

健康の大切さを実感する 資質・能力	目指す子どもの姿
知識	健康が自分にとってどのような意味があるのかを理解することができる子ども。
思考・判断	自分と健康との関係について具体的に考えることができる子ども。
関心・意欲・態度	健康について関心をもち、進んで学習に参加し、学んだことの価値を感じることができる子ども。

本研究では、子どもが知識を用いて対象について考え、思考・判断が働くことで、学んだことが学習態度や日常化への意欲として表出すると考える。そのため、健康の大切さを実感する資質・能力の関係は【図2】のようになる。



## 2 副主題「知識の活用を位置付けた学習活動の工夫を通して」とは

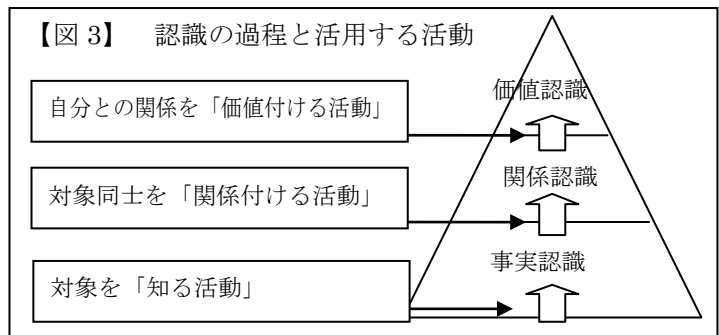
健康への認識を価値認識へ変容させるために、認識の過程に応じた学習段階を設定し、それぞれの段階に既有知識や経験などの認識した知識を活用するための活動を仕組むことである。

### (1) 「知識の活用を位置付ける」について

本研究では、【図1】の認識の過程を基に学習段階を設定する。事実認識できるようにするまでの段階、関係認識できるようにするまでの段階、価値認識できるようにするまでの段階として1単位時間を構成する。事実認識できるようにするまでの段階は、学習内容の基本的な事項を習得するものであり、そこでは、子どもの経験や既有知識を活用することが考えられる。次に、関係認識できるようにするまでの段階では、事実認識したもの同士や、事実認識したものと自分の経験を関係付けてとらえ、学習内容の確実な理解を図る。最後に、価値認識できるようにするまでの段階では、学習した内容と自分の経験との関係性を振り返るなど、自分にとって学習したことがどのような意味をもつのかを価値付ける。

### (2) 「学習活動の工夫」について

【図1】の認識の過程と【表1】の認識の姿を基にすると、認識の過程に応じた活動は【図3】のようになる。まず、認知的側面から**事実認識するために活動**を行い、対象や自分についての**事実認識**を確かなものにする。対象と自分とのかかわりについて認識することで学習の課題をつかみ、学習に対する意欲を持たせる。そのための活動を「知る活動」とする。次に、事実認識した事柄を**関係付けるために活動**を行い、対象同士の関係や対象と自分との関係を確かなものにする。そのための活動を「関係付ける活動」とする。最後に、関係認識したものについて、**自分にとっての意味を価値付けるために活動**を行い、自分にとっての価値付けを確かなものにする。そのために、自分を振り返ったり、行動のよさやこれからの行動について考えたりすることを「価値付ける活動」とする。それぞれの活動と段階、ねらいについては【表3】のとおりである。



段階	活動	ねらい
知る	知る活動	対象についての事実認識を確かなものにする。対象にかかわる自己の状態を認識することで学ぶ意欲を持たせる。
関係付ける	関係付ける活動	事実認識したものの同士を関係付けて認識できるようにする。学習内容についての理解を深める。
解る	価値付ける活動	関係付けて、あるまとまりとしてとらえたものが、自分の生活にとってどのような意味があるのか、価値付けることができるようにする。

このように、子どもが既有知識や事実認識した知識を活用することで、「なるほど」「こうすればできそうだ」という学習内容についての見通しをもつことができ、学習意欲を高めることにもつながり、感情的側面への高まりにもつながる。

本研究では、学習活動を「**既有知識などの認識した知識の活用**」の視点から工夫することで認知的側面、感情的側面に作用させ、その結果「知識」「思考・判断」「関心・意欲・態度」を高めていこうとするものである。

### Ⅲ 研究の目標

認識の過程に応じた学習段階を設定し、それぞれの段階に知識を活用する活動を仕組むことで、健康の大切さを実感する子どもを育てる保健領域の学習指導の在り方を究明する。

### Ⅳ 研究の仮説

体育科保健領域の学習において、以下の工夫を行えば、子どもは、健康の大切さを実感することができるだろう。

- 1 単位時間を認識の過程に応じて「知る」「関係付ける」「解る」の 3 段階で構成する。
- 学習活動の工夫。

学習段階に、既有知識を活用する「知る活動」、事実認識した知識を活用する「関係付ける活動」、関係認識した知識を活用する「価値付ける活動」を仕組む。

### Ⅴ 研究の具体的構想

#### 1 認識の過程に応じた学習段階

##### (1) 「知る」段階

事実認識ができるようになるまでの段階を「知る」段階とする。この段階のねらいは、対象とのかかわり方を振り返るなどすることで学習に対する意欲を高めたり、学習の基本的な事項を理解したりすることである。

## (2) 「関係付ける」段階

関係認識ができるようになるまでの段階を「関係付ける」段階とする。この段階のねらいは、子どもが事実認識したものの同士を関係付けて理解したり、事実認識したものと自分の経験を関係付けて理解したりすることである。

## (3) 「解る」段階

価値認識できるようになるまでの段階を「解る」段階とする。この段階のねらいは、子どもが自分にとって学習内容がどのような意味があるのかを価値付けることである。

「知る」「関係付ける」「解る」それぞれの段階におけるねらいと期待する子どもの姿は【表4】のとおりである。

段階	ねらい	期待する子どもの姿
知る	学習の基本的事項を理解することができる。	学習の基本的な事項を理解している。新しい学習内容への興味・関心を抱いている。
関係付ける	事実認識したものの同士を関係付けて理解したり、自分の経験と関係付けて理解したりすることができる。	学習内容への理解を深めている。自分の生活と基本的事項、基本的事項同士を関係付けて考えている。
解る	自分にとって学習内容がどのような意味があるのかを価値付けて理解することができる。	自分の生活や経験について、学習内容を基に理解している。学習する価値を感じている。

## 2 知識を活用する学習活動

### (1) 「知る活動」について

対象についての事実認識を確かなものにし、対象にかかわる自己の状態をとらえる活動として、「知る活動」を設定する。子どもが対象について様々な観点からとらえていくことができるようにするため、子どもに**既有知識や経験を活用**させ、小グループで付箋紙に考えを記入させるなどして多様な考えを表出させ、見方や考え方を広げさせる。また、生活の中で、「対象とどのようにかかわっていたのか」などの対象にかかわる自分の状態をとらえさせ、課題をつかませるために、これまでの経験を想起させたり、対象についての現段階での考え方を明らかにさせたりする。また、教師による対象についての語句の説明など、基本的事項を教わることも事実認識を確かなものにする活動である。

### (2) 「関係付ける活動」について

関係認識できるようにするための活動として、事実認識したものの同士を「関係付ける活動」を設定する。子どもが関係認識できるようにするためには、**事実認識しているものを相互に関連**させたり、まとまりごとに分類整理したりすることが必要であると考え。そのため、関係認識できるようにする活動としては、付箋紙に考えを記入したものを、共通のまとまりごとに分類整理する活動を行う。また、事

実認識したものを環境の要因や行動の要因などと関連付けることで関係認識できるようになると考える。そのため、事実認識できているものに対して具体的な生活の場面に当てはめ、事実認識したものをどのように扱うか、または、どのように対処するかということなどを考えさせる。場面に当てはめて考えることで、事実認識したもの同士をひとまとまりのものとして考えることができ、そのまとまりと自分との関係をとらえることができると考える。

### (3) 「価値付ける活動」について

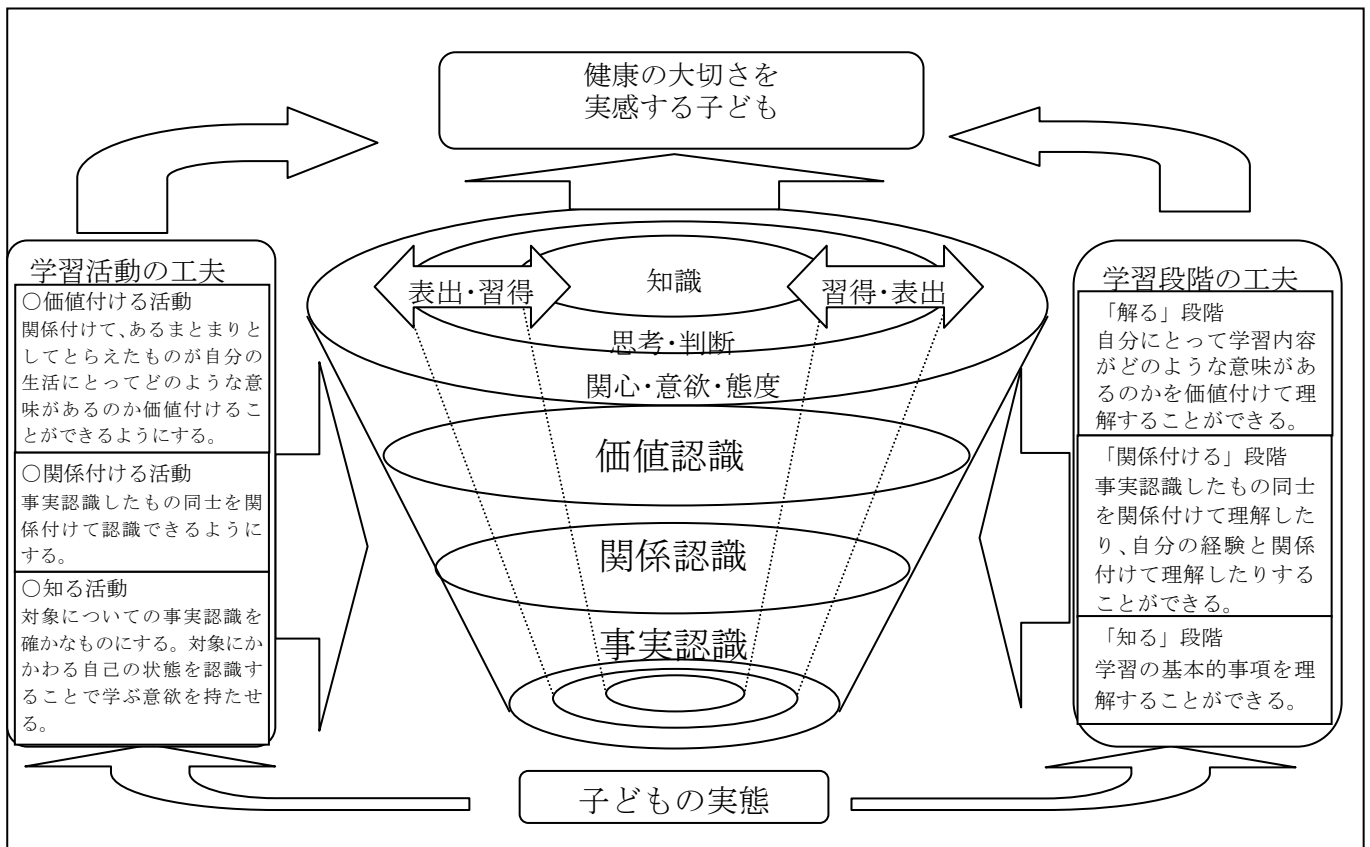
価値認識できるようにするための活動として、自分にとってどのような意味があるのかを「価値付ける活動」を設定する。子どもが価値認識できるようにするためには、**関係認識した対象と自分とのかかわりを改めて見つめ直させる**ことが必要である。対象とのかかわりを改めて見つめ直させるために、生活の場面で対象と良好にかかわっている映像を視聴させたり、子どもとかかわりの深い養護教諭等から日常生活での対象とのかかわりや生活の仕方について評価を聞かせたりする。そうすることで、子どもは対象とのかかわりを見つめ直すことができると考える。さらに、見つめ直すことで高まった「健康の大切さ」について認識したことを交流することで、健康に対する考え方が広がったり、自分の考えのよさを確かめたり、健康に対する考えを深めたりすることができると考える。

本研究では、「知る」「関係付ける」「解る」それぞれの段階に事実認識できるようにするための「知る活動」、関係認識できるようにするための「関係付ける活動」、価値認識できるようにするための「価値付ける活動」を位置付ける。具体的な活動とねらいは【表5】のとおりである。

【表5】 段階と活動について一覧

段階	活動	ねらい	内容	方法
知る	知る	自分の状態を理解し課題をつかむ。	対象とのかかわりを想起する。	交流・付箋紙に記入
		対象について基本的なことを理解する。	教師から対象についての説明を受ける。データや絵などを基に対象について概要をつかむ。	教師からの情報提示・交流・実験
関係付ける	関係付ける	対象同士の関係性や自分との関係をとらえる。	生活の場面に当てはめて考え、自分と対象とのかかわりを確かにとらえる。	場面に当てはめる・調査
		対象同士の関係性をとらえる。	事実認識したもの同士を観点別に分類する。	分類整理する・調査
解る	価値付ける	自分の生活にとってどのような意味があるのかを価値付ける。	自分の考えと友達の考えを交流することで、自他の考えのよさを発見したり、新たな視点に気付いたりする。	交流
			生活の中での対象と自分とのかかわりを客観的にとらえ、かかわり方のよさを確かめる。	映像の視聴・養護教諭等の話を聞く

### 3 研究構想図



### 4 検証のねらいと方途

#### (1) ねらい

仮説に基づく実践授業により資料を収集、結果を分析し、仮説を検証する。

#### (2) 対象

粕屋町立粕屋中央小学校 第5学年4組 36名

#### (3) 期間

平成23年10月6日(木)～10月14日(金) 全3時間

#### (4) 内容と方法

仮説を検証するために、学習計画に従って単元「心の健康」の3時間の授業と事前・事後調査を実施し、資料を収集する。

##### 【内容】

- 学習内容を自己の経験に基づいて理解することができたか。
  - 学習に価値を感じながら取り組むことができたか。
  - 認識した事柄を基に新しい事柄を理解することができたか。
- これらのことを検証するための、データを収集する。



【方法】

- 事前・事後調査のアンケートによる調査
- 学習ノートへの記述
- 学習の様相観察(活動の様相、発言、つぶやき、挙手及び表情など)
- 形成的授業評価アンケート「保健の教授－学習過程評価票(植田誠治 1998)」
- 学習後の感想文

(5) 目指す子どもの姿

人や社会とかかわっていくには、心と体が良好な状態を保つことが必要であり、心を良好な状態に保つことを自分の生活と関係付けてとらえることができる子ども。

【表 6】 単元「心の健康」における目指す子どもの姿

知識	よりよい心の発達のために、自分のこれまでの経験の意味やこれからの経験の意味を価値付けて理解することができる子ども。
思考・判断	心の発達について自分の経験を基に考えることができる。生活場面に当てはめて心の健康について考えることができる子ども。
関心・意欲・態度	心の健康について学習したことの価値を感じ、進んで学習に取り組むことができる子ども。

(6) 第 5 学年 単元「心の健康」

		活動と内容	検証方法	評価の観点
ア 心 の 発 達  1 時 間	「知る」段階	《教師からの情報提示と交流》 心が発達することと心の働きについて事実認識する。	様相観察	(知識) 心が発達することを理解している。
	「関係付ける」 段階	《分類整理する・交流》 自分が成長したと感じたカードを感情、社会性、思考力等に分類し、心の働きと心の発達を関係認識する。	様相観察・音声分析	(思考・判断) 理由を明確にしながらかードを心の働きに分類することができる。
	「解る」段階	《養護教諭の話聞く・写真を見る》 心の成長と心の働きについて自分の経験の意味を価値付ける。	様相観察・表現物分析	(知識) 経験によって感情、社会性、思考力等の心の働きを成長させてきたことを理解することができる。
	事後		アンケート	(関心・意欲)
イ 心 と 体 の	「知る」段階	《教師からの情報提示と交流》 心と体は影響し合うことを事実認識する。	様相観察	(知識) 心と体は影響し合うことを理解している。
	「関係付ける」	《場面に当てはめる・交流》	様相観察・発言分	(思考・判断)

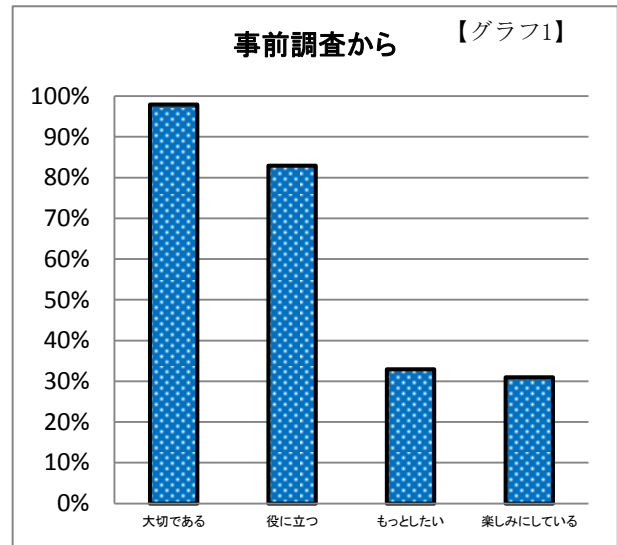
相互の影響 1時間	段階	経験を基に心と体が影響し合っていることを自分の状態と関係認識する。	析・表現物分析	体と心のつながりを改めて理解している。
	「解る」段階	《養護教諭の話》 心の働きと体の関係、どちらも整える必要性について自己の行動を価値付ける。	様相観察・表現物分析	(知識) 心と体は影響し合っているため、健康に過ごすには心と体の状態を整える必要があることを理解している。
	事後		アンケート	(関心・意欲)
不安や悩みへの対処 1時間	「知る」段階	《付箋紙に考えを記入》 不安や悩みは多様にあり、だれもが経験することを事実認識する。 不安や悩みの対処法を出し合い 対処法は多様にあることを事実認識する。	様相観察	(思考・判断) 自分の経験を想起している。
	「関係付ける」段階	《場面に当てはめる活動》 人の特徴と不安や悩みへの対処を関係認識する。	学習プリントの記述	(思考・判断) 個に応じた対処法などについて考えている。
	「解る」段階	《養護教諭の話》 大人でも不安や悩みがあること。 実際に対処していることの意味を価値付ける。これから多様な方法で対処する意味を価値付ける。	学習プリントの記述	(知識) 不安や悩みに対して様々な方法で対処することが心の健康に関係していることを理解している。
	事後		アンケート	(関心・意欲)
	単元後		アンケート	(関心・意欲)

## VI 研究の実際と考察

### 1 事前調査

#### (1) 保健領域の学習に対する意識調査

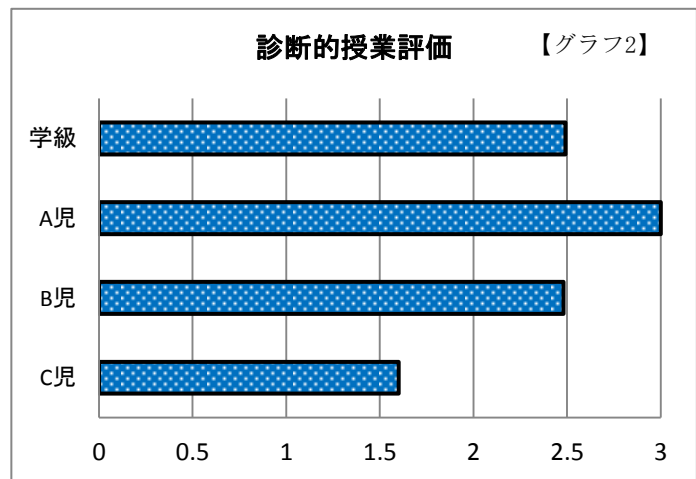
児童の体育科保健領域の授業についての意識を調査するために、保健の学習に関する関心・意欲・態度を中心としたアンケート「保健授業の教授－学習過程評価票」を参考に事前調査を行った。その結果、「保健の学習は大切である」とほぼすべての児童が回答している。また、「保健の学習は役に立ちますか」という質問には 83%の児童が「はい」と回答しており、保健の学習は大切であり役に立つものであるととらえている。「保健の学習をいつも楽しみにしている」という児童は 30%程度であり、「どちらでもない」と「いいえ」を合わせると 70%となっている。【グラフ 1】



1】

#### (2) 診断的授業評価

児童の体育科保健領域授業についての意識を調査するために、保健の学習に関する関心・意欲・態度を中心としたアンケート「保健授業の教授－学習過程評価票」を参考に診断的授業評価を行った。16 項目の質問に対して 3 段階で評価させ、学級の平均値を算出した。学級全体の総合評価の平均点は 2.49 【グラフ 2：3 点満点】となった。学級平均と比較し、高い点数だった A 児、学級平均とほぼ同じ点数だった B 児、学級平均よりも低い点数だった C 児を抽出児として設定した。



#### (3) 保健領域の学び方に対する実態調査

学び方、既有知識の活用の仕方について実態を把握するために、4 人 1 組のグループで付箋紙に考えを記入する活動を行った。どの児童も、自分の考えを付箋紙に書き出す活動や分類整理する活動により、グループ内で活発に意見を出すことができた。抽出児の様子については次の通りである。

抽出児	診断的授業評価	グループ活動での様子
A児	学級平均より高い	グループの友達の考えを聞いてまとめることができる。
B児	学級平均とほぼ同程度	進んで話し合いに参加し、自分の考えを表現することができる。
C児	学級平均より低い	自分の考えに自信がない様子であり、友達の意見に頼る傾向がある。

## 2 第1時 「心の発達」

### (1) 目指す子どもの姿

- ア 心の働き(感情・思考力・社会性等)と心の発達について、**自己の経験を踏まえて理解**することができる。(知識)
- イ 心の成長について、自分が経験したことと心の働きとの関係をとらえることができる。(思考・判断)
- ウ 心の発達について関心をもったり**価値を感じたりして**、意欲的に学習に取り組んだりすることができる。(関心・意欲・態度)

### (2) 各段階のねらいと手立て

#### ① 「知る」段階

「**心は発達すること**」を理解させるために、教師が提示した絵(子どもが泣いている絵)を基に、泣いている理由について交流した。また、「**心には感情・社会性・思考力などの働きがあること**」を理解させるために、教師から情報を与えグループでカードを分類整理させた。さらに、**単元を通して学習の見通しを持たせる**ために「保健学習についてのアンケート結果」を基に交流した。

#### ② 「関係付ける」段階


「**心は発達すること**」と「**心の働き**」を関係付けて理解させるために、グループごとに行ったカードの分類について違いや理由を交流した。







#### ③ 「解る」段階

**心の働きについて、自己の経験を踏まえて理解**させるために、心の発達について養護教諭から話を聞く場面を設定するとともに、心の発達を具体的にとらえることができる写真を見せて、学習をまとめた。

### (3) 授業展開

段階	学習活動(◆) 認識の段階(◇)	子どもの姿(全体・抽出児)		
		A児	B児	C児
知る	◆単元の見通しを持たせる活動。 ◇アンケート結果 「心を成長させたいか」 とても29名 どちらかと言えば7名 どちらともいえない1名 「どうすると心が成長するか知っているか」 知っている6名 何となく17名	T:心を成長させたいと思っている人はどのくらいいたと思いますか。 c1(つぶやき):30人くらいかな。 ◇アンケート結果を提示。 c2(つぶやき):おお。成長させたい人が多いね。 T:その方法を知っているかという質問の答えはどうなっているのでしょうか。 これを見て、これからどんなことを勉強していきたいですか。 B児挙手。 c3:心が成長する方法を見つけたいです。		
		A児、B児、C児の単元を通してのめあて		
		A児	心の健康の勉強をしてそれでわかったことを今後いかせるようになるよ	
	B児	心が成長するためにどうしたらいいか考えよう		
		客観的に自己をふり返ることで単元の見通しをもつことができた。		

<p>知らない 14 名</p> <p>◆おなかがすいて泣いている 10 歳児、5 歳児について交流する。</p> <p>提示した絵</p> 	<p>C 児 どうすれば心が成長するかをひらき行して心が成長するようしよう</p>	<p>T: この絵は、何をしていますでしょうか。(男の子が泣いている絵を提示)</p> <p>c4(つぶやき): 泣いとう。悲しんでいる。</p> <p>T: みんなと同じ 10 才です。おなかがすいて泣いています。</p> <p>c5: 私は情けないと思います。</p> <p>B 児 挙手</p> <p>c6: 10 才なのに、幼稚だ。</p> <p>T: 5 歳児だったらどう思いますか。</p> <p>A 児、B 児、C 児、挙手。</p> <p>c7: 仕方ないと思います。</p> <p>c8: 5 才だったら我慢ができないから、仕方がない。</p> <p>T: ということは、何かが成長したんだろうね。何が成長したのかな。</p> <p>c9: 心。(ほぼすべての児童が声を合わせて即答)</p>
<p>知る</p> <p>◇心が発達することを理解する。</p>	<p>◇心が発達することを理解する。</p>	<p>A 児、B 児、C 児の反応</p> <p>・友達や教師の発言に<u>すぐに反応</u>し挙手するなど進んで学習に参加している。</p> <p>めあて 心の働きを知り、どうすると心が発達するか考えよう。</p> <p>◇カードの内容は次の通り。『算数がわかるようになった』『ノートまとめられるようになった』『きまりを守るようになった』『悪口を言わなくなった』『怒らなくなった』『最後までがんばるようになった』</p>
<p>◆全体の場で 6 枚のカードを社会性、思考力、感情に分類する。カードを分類して見せた後、分類の観点を示し説明を加える。</p> <p>◇心の働きについて理解する。</p>	<p>◆全体の場で 6 枚のカードを社会性、思考力、感情に分類する。カードを分類して見せた後、分類の観点を示し説明を加える。</p> <p>◇心の働きについて理解する。</p>	<p>T: 『ノートまとめられるようになった』と、どれが同じかな。勉強のこと、これのことを実は心の働きの 1 つで「思考力」と言います。心の働きの 1 つです。筋道を立てて考えることや勉強がわかる、というのは思考力の働きになります。</p> <p>『算数がわかるようになった』これは、勉強のことだから・・・思考力ね。</p> <p>全体で分類しているときの A 児、B 児、C 児の反応</p> <p>・考えができたときには挙手をするなど進んで学習に参加している。</p> <p>・発言者の方を見て説明を聞いている。</p>
<p>関係付ける</p>	<p>◆各グループで分類した「入学してできるようになったこと」カードの</p>	<p>他のグループが「隅々までそうじができる」を思考力に入れたのを受けて</p> <p>C 児: 僕たちは、「隅々までそうじができる」は社会性だと思いました。そうじはボランティア活動の一部だと思うからです。</p>

<p>関係付ける</p> <p>違いについて、その理由を話し合う。  <b>◇「心は発達する」ことと「心の働き」を関係付けて理解する。</b></p>	<p>c10 : ボランティア活動は人のためにするという。だから、<u>社会性</u>。</p> <p>c11 : そうじの時間の約束にしゃべらないというのが。しゃべると<u>約束を破ることになるので</u>、そうじのことは社会性だと思う。</p> <p>c12 : そうじはみんなで<u>協力してできるようになるから</u>、社会性になると思う。</p> <p>c13 : そうじの順番を考えてやることになるから、思考力に入ります。</p> <p>T : 心の働きというのは、きれいに分けられるものではなさそうですね。では、<u>どうやったら、心が発達すると思いますか。</u></p> <p>c14 : . . .。(学級全体が沈黙) ← <b>心の働きと発達を関係付けることができていない。</b></p> <p>(グループでの交流後)</p> <p>c15 : 社会性を育てようと思ったら、挨拶をたくさんすればいいと思います。</p> <p>A 児 : 考えていることや目標にしていることを一つ一つ実行していくといいと思います。</p>
	<p style="text-align: center;">A 児、B 児、C 児の反応</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="422 862 742 1176"> <p>「海が好きになった」は、感情になるね。</p>  <p>全体の場で分類する A 児</p> </div> <div data-bbox="758 862 1077 1176"> <p>ぼくの考えとちがっているな。</p>  <p>挙手する B 児</p> </div> <div data-bbox="1093 862 1412 1176"> <p>僕たちのグループは、こうしました。</p>  <p>考えを述べる C 児</p> </div> </div>
<p>解る</p> <p>◆養護教諭の話の聞いたり写真を見たりして考えをまとめる。  <b>◇心の働きについて、自己の経験を踏まえて理解する。</b></p>	<p>養護教諭の話 (要約)</p> <p>○<u>委員会活動を行うことは社会性の発達</u>にかかわる。<u>我慢できるようになったことが感情の発達</u>とかかっている。自分の気持ちを押さえるなども感情の発達になる。<u>思考力は、勉強</u>のことが主になる。学校生活の中で、涙が出たり、勉強をしたり、そういったことの一つ一つが、<u>心が成長していくのに大切な経験</u>になる。</p> <p>○昼休みなどにけがをしたり具合が悪くなったりした人を保健室に連れてきてくれるのは、5年生が一番多い。一緒に来てくれることで具合の悪い人も安心した気持ちになる。そうすることで、<u>周りの人の心も発達</u>している。</p> <div style="text-align: right;">  <p>養護教諭の話聞く児童</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="135 1713 438 1926">  <p>提示した写真</p> </div> <div data-bbox="438 1713 742 1926">  </div> <div data-bbox="758 1713 1460 1960"> <p>写真の提示・教師の話(抜粋)</p> <p>○組み体操の写真: 土台の人のことを考えて上に乗ったり、やり遂げたあとに達成感を味わったりして<u>社会性や感情をしっかりと働かせ、発達</u>させている。</p> <p>○キャンプの写真: 自然の中で楽しいと感じたり、みんなと力を合わせたりする<u>経験</u>も心を発達させる。</p> </div> </div>



A 児、B 児、C 児の反応(学習ノートのふり返りから)		
A 児	今日の学習で、人の気持ちや、自分の気持ちも、考えて組み立てようなどをして、人は、しらないうちに、じい、成長していったので、うごかした。	自分の経験を踏まえて心の成長を理解している。
B 児	ぼくはこれから大セカにしていきたい物は、感小書をおたがいにらせる友達です。前も大セカだったけど、あつ、ため、大セカにしたいと思ひました。	感情について、自分の経験を振り返って理解している。
C 児	これからが、ん、は、う、と、思、ひ、こ、は、心、が、発、達、す、よ、う、に、す、る、で、も、少、し、お、つ、少、し、お、つ、戻、番、に、や、つ、て、い、こ、う、と、思、ひ、ま、す。	心が発達することは理解している。

#### (4) 授業後のノート分析の結果

認知的側面における価値認識までの過程を【表7】のように整理し、ノートの記述を分析した。

【表7】 第1時における評価規準と期待する児童の記述

	評価規準	期待される子どもの記述
事実認識	心の働きには、感情、思考力、社会性などがあることを理解している。心が発達することを理解している。	思考力、感情、社会性の働きがあること、または、心が成長することに対して「分かった」「知った」という記述がある。
関係認識	心の発達と心の働きを関係付けてとらえることができる。	心の働きに関する記述があり、それらを活用することと心が発達することを関連して理解できている記述がある。
価値認識	心の働きについて、自己の経験を踏まえて理解することができる。	心の働きについて自己の経験を踏まえた記述がある。日常の活動や自分の行動と関連させた記述がある。

【資料1】 認知的側面での価値認識まで高まった児童のノート例

思考力、感情、社会性、この3つを、学校や家庭でもかかして、例えば、喜ぶ、悲しむ、感心、理、か、い、わ、ん、に、い、き、買、入、り、知、る、や、げ、な、り、お、ん、た、ま、に、い、れ、た、い、ま、す。でも、たまに、口からかきまうことがあつ、い、ので、あ、り、口、から、か、か、い、よ、う、に、な、い、で、す。免、強、も、自、分、か、ら、で、き、る、よ、う、に、な、り、た、い、で、す。

【資料2】 認知的側面での関係認識まで高まった児童のノート例

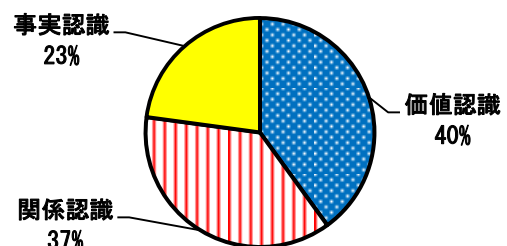
心は人の気持ちも考えたりすると、心か、  
発達するから、これからは人の気持ちを考えたり、勉強を集中してがんばることを、こ  
れからも大セカにしていききたいです。そのほかの、えうい  
も集中してすみずみまでできるよりにがんばりたいです。

【資料3】 認知的側面での事実認識の段階にある児童のノート例

今回の学習で、心の成長について、矢、り、ま、じ、ら、  
感情、社会性、思考力の3つ、の、心、が、あ、る、と、  
わ、か、ら、て、す、ご、か、た、で、す。今、度、の、学、習、は、あ、つ、  
と、わ、く、心、に、つ、い、て、矢、り、た、い、で、す。

【資料1~3】は学習後の児童のノートの記述を【表7】により分類したものの例である。【資料1】からは、自分の経験を心の成長として理解していることがうかがえるため、価値認識に相当する。【資料2】

ノートの分析結果 【グラフ3】



からは、心の働きと心の成長を関係付けてとらえていることが分かるため関係認識である。【資料3】は、本時学習において心の働きについて理解できたことを読み取ることができるため事実認識である。評価規準によって児童のノートの記述を評価し、割合を表したものが【グラフ3】である。ノートの記述から価値認識で考えを表出している子どもが40%、関係認識で表出している子どもが37%、事実認識で表出している子どもが23%となっている。

## (5) 考察

### ① 「知る」段階

事前アンケートの結果を基に、感じたことを交流したことで、単元の見通しをもつことができたと考ええる。その根拠として、p12のc3「心が成長する方法を見つけたい」という発言が挙げられる。また、抽出児の単元のためあてからも分かる通り、ほぼすべての子どもが「心を成長させる方法を学んでいく」という単元の見通しをもつことができた。交流の中で、「心を成長させたい人は多いが方法を知らない」ということに気付かせたことが、「心を成長させる方法を知りたい」という意欲を高めることに有効であったためであると言える。

【写真1】 分類する児童



ということに気付かせたことが、「心を成長させる方法を知りたい」という意欲を高めることに有効であったためであると言える。

**教師の情報提示を受けて既有知識を活用して交流する活動を行ったことで、「心は発達する」ことについて理解することができた**と考える。その根拠として、p13のc8の発言が挙げられる。この児童は、心の働きである感情が発達していることをとらえており、c9の反応からも子ども自身の体験や考えを活用して交流させることで「心は発達する」ということを理解することができたと考える。

### 【資料4】 B児C児のいるグループの話し合い(抜粋)

c16:「隅々までそうじできるようになった」は、何。

c17:社会性じゃないかな。(黒板の説明を確認)

c18:だってボランティアとかは社会のことでそうじとかするから。

c19:「好ききらいが減った」は感情。好ききらいが減ったら喜びがあると思うから。

さらに、心の働きである社会性、思考力、感情について教師が説明を行い、その**知識や経験を**活用して**分類整理する活動**を行ったことで**心の働きについて**

**理解を深めることができた**と考える。その根拠として、【資料4】が挙げられる。この資料からは教師の説明に基づいて分類したり、c19「好ききらいが減ったら喜びがある」と、経験を基に分類したりする姿が見られる。カードを操作することで心の働きを具体的にとらえることができ、心の働きについて理解が深まったと言える。それは、p15【グラフ3】のすべての児童が事実認識できていることから分かる。また、**グループで分類する作業を行わせたことは、学習意欲を高める上でも有効であった**。その根拠として、立ち上がってカードを操作する姿が見られたこと、活発に意見を交流する姿が見られたことが挙げられる。カードを複数準備することで、【写真1】のようにすべての児童が活動に参加することができ、心の働きの説明を参考にできる状況であったために児童は活発に意見を交換することができていたと言える。



② 「関係付ける」段階

カードを分類整理する際にその理由を話し合わせたことが、自分の心の発達と心の働きを関係付けて理解させることには十分につながらなかった。その根拠は、p14のc14「…」(学級全体が沈黙)である。教師の問いかけに対して答えることができなかった。このような反応となった理由として、授業展開のp13C児の発言からc13が挙げられる。この場面では「なぜそのように分類したのか」について交流している。そのために、思考力や社会性といった心の働きについては理解が深まっている。しかし、自分の心の発達と心の働きを関係付けて理解するまでには至っていない。この場面では、p14c12「そうじはみんなで協力してできるようになるので、社会性になると思う。」の発言とc13「そうじの順番を考えてやるから、思考力になると思います。」の発言を比較させ、「協力」を意識して取り組むことで社会性の働きが発達し、「順番」を意識して取り組むことで思考力の働きが発達してきたことに気付かせることができれば、児童は自分の心が発達したことと心の働きを関係付けて理解することができたのではないかと考える。

【資料5】 抽出児のいるグループの話し合い(抜粋)		
抽出児	A児のグループ	B児・C児のグループ
話し合いの様子	A児1:考えたことを実行していけばいいんじゃない。 c:どうということ。 A児2:カードに書いてあることを意識してすれば、成長するんじゃない。 c:どうということ。 A児3:社会性の所にあるカードに書いてあることをすれば、社会性が…。	B児1:どうすれば成長するかいな。 C児1:全部してみる？例えば、挨拶は社会性だから、挨拶は社会性だとわかって挨拶をしたら実行できる。 B児2:なるほどね。

【資料5】は、c14「…」後の抽出児のいるグループでの話し合い活動の様子を抜粋したものである。A児・C児の発言には、「知る」段階で理解した「社会性」と「心は成長する」ことを関係付けてとらえていることが分かる(A児3・C児1)。しかし、A児が「カードに書いてあること」と発言していることから、カードの内容を自分の心の成長としてとらえることができていないと考えられる。そのため、A児は自分の心の発達と心の働きを関係付けて理解できていないと言える。

この段階では、「どのようなことを考えていたからそうじが上手になったのか」等、児童の経験を心の働きとして想起させることで、自分の心の発達と心の働きを関係付けて理解させることができたと考えられる。

③ 「解る」段階

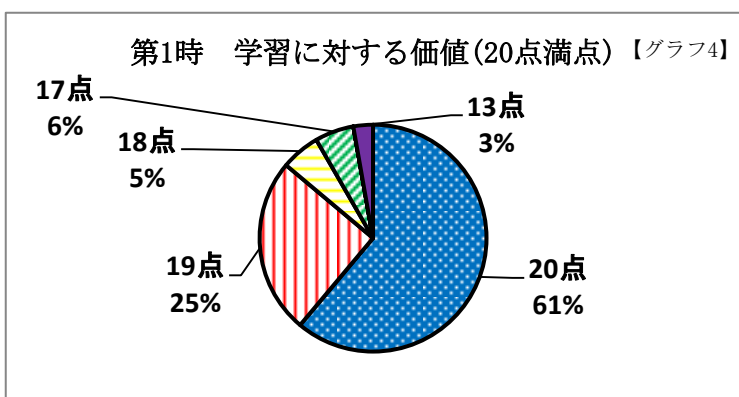
養護教諭の話聞く場面の設定と写真の提示を行ったことは、児童が心の発達と心の働きを関係付けてとらえることに有効であり、経験に基づいて理解させるのにも効果があった。心の発達と心の働きを関係付けるのに有効であったと考えた根拠として、p15の【グラフ3】が挙げられる。「関係付ける」段階において、「心の働き」と「心の発達」を関係付けて理解させることが十分にはできなかったが、養護教諭の話聞くことで77%の児童が関係認識、価値認識で考えを表出することができていた。これは、養護教諭の話の内容が、「関係付ける」段階までに児童が理解したことについて、児童の経験を基に説明したものであったため、児童は「心の働き」と「心は発達する」ことを関係付けることができたのだと考える。

経験に基づいて理解させるのに効果があつたと考えた根拠として、自己の経験を踏まえて心の働きと心の発達を理解したことを表出できた子どもが40%いたことが挙げられる。「関係付ける」段階までに、自分の経験を基に心が発達することを関係付けて理解させることは不十分であつた。

**【資料6】 学習後の児童のノート**  
 これから、人の気持ちをしっかり考えたり、友達と話したり、外で遊ぶら<sup>い</sup>こととしていきたいと思つたし、それがとても大切なことだと思つていました。思考力や感情、社会性は、心の成長にやくだ<sup>ら</sup>つていて、大切にしていこうと思つていました。

しかし、養護教諭が児童の学校生活での様子を基に心の発達と働きについて説明したことで経験に基づいて理解し、ノートに表出した児童が40%になつたと考える。その理由として、【資料6】の児童のノートの記述がある。養護教諭は「友達の気持ちを考えることで感情や社会性等の心の働きが成長する」と話しており、そのことに触れて「人の気持ちをしっかり考えたり…」と記述したのだと考える。

**【グラフ4】「保健学習の教授—学習過程評価票における『保健学習の価値』に関する項目の獲得点数の割合」**では、18点以上と評価している児童が90%を超えている。ノートの記述として表出することは困難であるが、児童は学習した事柄に対して高い価値を感じることができた。【資料6】の児童のノートの記述からも、本時学習内容を大切であると感じていることが分かる。



また、p15 抽出児のノートの振り返りには、「**組み体操などをして**」(A児)「**前も大切だったけど**」(B児)の記述がある。これは、本時の学習内容である「心は経験によって成長する」ことを自分の経験に基づいて理解している姿であると言える。A児は写真の提示・教師の話によって、経験を基に本時の学習内容を理解していることが分かる。B児は自分を振り返って感情を大切にしてきたことを、経験に基づいてとらえていることが分かる。C児については、学習内容に対する理解は見られるが、経験を基に理解するまでには至っていない。

これらのことから、本時学習において心の働きと心が発達することを関係付けて理解させ、学習に対する価値を感じさせることができた。しかし、すべての児童が経験に基づいて心の発達と働きを理解できるまでには至らなかった。今後、すべての児童を価値認識まで高めるためには、学習内容と自分の経験を照らし合わせることで経験の意味を価値付けることが必要であると考え。そのためには、個人の経験や体験を本時の学習の中で想起させ活用させることが必要であると考え。

### 3 第2時 「心と体の相互の影響」

#### (1) 目指す子どもの姿

ア	心と体どちらも整える必要性を理解することができる。(知識)
イ	心と体の相互の影響について体験を基に考えることができる。(思考・判断)
ウ	心と体が相互に影響することについて関心をもったり価値を感じたりして、意欲的に学習に取り組んだりすることができる。(関心・意欲・態度)

#### (2) 各段階のねらいと手立て

##### ① 「知る」段階

心の状態によって体に影響があることを理解させるために、運動会のかけっこ場面の絵を提示し、人物に共感させ、心の状態によって体の状態が変化することについて交流した。


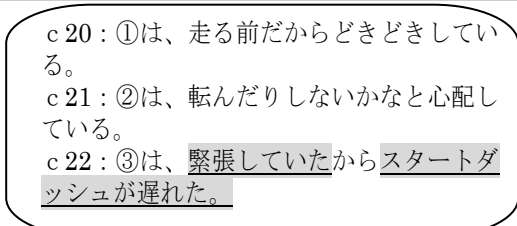



##### ② 「関係付ける」段階

「心の状態が体に影響すること」と「体調が心の状態に影響を与えること」を関係付けて理解させるために、体験を振り返らせて交流したり、ゲームを通して心の状態によって体に変化があることを確かめさせたりした。

##### ③ 「解る」段階

心と体を良好に保つ必要性を理解させるために、養護教諭から心の働きと体との関係について話を聞く場を設定し、学習をまとめた。

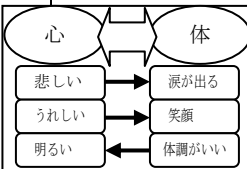
#### (3) 授業展開

段階	学習活動(◆) 認識の段階(◇)	子どもの姿(全体・抽出児)		
		A 児	B 児	C 児
知る	◆かけっこの場面について話し合う。 ◇心の状態によって体の調子が変わることを理解する。	 ①	 <p>c 20: ①は、走る前だからどきどきしている。 c 21: ②は、転んだりしないかなと心配している。 c 22: ③は、緊張していたからスタートダッシュが遅れた。</p>	
		 ②  ③		<p>心と体は関係がありそうだ。</p>
		A 児、B 児、C 児の反応		
		<p>・1枚目の絵の提示から挙手するなど教師の問いかけに対して反応していた。</p>		<p>・提示された絵を見るが進んで挙手することはなかった。</p>

関係付け

◆心の状態で体に変化が起こった体験、体の調子によって心に変化が起こった体験を出し合う。

◇心から体への影響、体から心への影響を関係付けて理解する。



・心と体の影響を板書で図式化することで相互の影響をとらえやすくなった。

◆ゲームをして心の状態と体の変化を確かめる。

◇心の状態と体の状態を関係付けて理解する。

めあて 心と体にはどのような関係があるか調べよう

(心の状態によって体に変化が起こることについて話し合う)

c 23: 大切にしていたものがなくなって、**悲しい気持ち**になった。**笑いたくても笑えない**状態になった。

c 24: ひいおばあちゃんが亡くなったとき、**悲しくて涙が出て**来ました。

c 25: **悲しく**なったときは、上手に**立てなくて**座ってしまった。

(体の状態で心に変化が起こることについて話し合う)

c 26: **体調が悪い**ときは、早く**元気になりたい**なという気持ち。

c 27: **体調が悪い**ときは、治るかな、とか、**不安な気持ち**になる。

心と体、相互の影響について理解している。

A 児、B 児、C 児の反応

A 児 わたしは、さごくかなしいことがおきたときは、体はなみだが出て止まりませんでした。そして、は数日間かなしいままでした。

心→体、体→心、それぞれ2つずつ体験を振り返り記入している。

B 児 ぼくはたん生日に、みんなからお祝いされたときうれしくてお祝いしました。あと、体がうれしくいえるが、すぐの早さで急激な変化がありました。

心→体、体→心、体験を振り返りすべて記入しようとしている。

C 児 体調がいいと、気がスッパリしておひやなことをおぼられる。

心→体、体→心、それぞれ1つずつ記入している。

・発言者の方を見て発言を聞き、自分も多数挙手するなど進んで学習に参加している。また、ノートへの記述も4カ所(指示は最低2カ所)であった。

・自分も多数挙手し、考えを述べた。ノートの記述は3カ所であったが、一つ一つが詳細に記されていた。

・ノートの記述は2カ所と指示されたことに取り組んだ。挙手はなかった。

(心の状態によって体に変化があることを確かめるために、緊張状態を感じるゲームを行った。ゲームの前後で脈を測りその違いを比較した。)



※ゲームを行う前に、落ち着いた状態で脈をとらせた。


「右手を重ねて、『1枚、2枚…』の声に合わせて下にある手を上にのせる。「恨めしや」の声で一番下にある手で他の人の手を叩く。」というゲームを行った。

ゲームの途中(どきどきしている状態)で、再度、脈をとらせた。

T: 確かめの結果、どんなことがわかりましたか。

c 28: 心と体は、**やっぱり**つながっていた。



		A 児、B 児、C 児の反応		
解 る	<p>◆養護教諭の話を聞きまとめる。</p> <p>◇心と体をバランスよく成長させる必要性を理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脈の変化：32→37</li> <li>・ゲームの時は笑顔で行い、脈を測るときは真剣な表情であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脈の変化 23→50</li> <li>・ゲームの時は笑顔で行い、脈を測るときは真剣な表情であった。ゲーム後は「増えた」と体の変化を確かめていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脈の変化 28→43</li> <li>・ゲームの時は笑顔で行い、脈を測るときは真剣な表情であった。こんなに増えたと、グループの友達に報告した。</li> </ul>
		<p style="text-align: center;">養護教諭の話(要旨)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・悩み事があるって体調を崩し、保健室に来る人も多い。(感情と体のつながり)</li> <li>・委員会活動で人の役に立っていると感じたら、やる気が起きて体が動くようになる。(社会性と体のつながり)</li> <li>・体調が悪いと、勉強にも集中できない。(思考力と体のつながり)</li> <li>・心と体がつながっているの、どちらも健康でいることが本当の健康につながっていく。</li> </ul> </div> 		
		A 児、B 児、C 児の反応(学習ノートのふり返しから)		
		<p>A 児</p> <p>今日の学習で初めて知った事は、心と体がつながっていることを初めて知りました。そして心が変わると体の様子も変わるようになるほどと思いました。</p>		<p>心と体が相互に影響し合っていることを理解している。</p>
		<p>B 児</p> <p>ぼくは心と体がつながっていることがわかるほど思いました。理由はぼくは心と体のつながりなんて考えたことが全然なかった。なので心と体がつながって関係があるときいてなるほどと思いました。</p>		<p>心と体が相互に影響し合っていることを理解している。</p>
		<p>C 児</p> <p>今日の学習で心と体からいって心と体がつながっているという事を知ることができました。理由は心と体がつながっていることがわからないとよくわからないからです。</p>		<p>心と体が相互に影響していることを経験と照らして理解している。</p>



#### (4) 授業後のノート分析の結果

認知的側面における価値認識までの過程を【表8】のように整理し、ノートの記述を分析した。

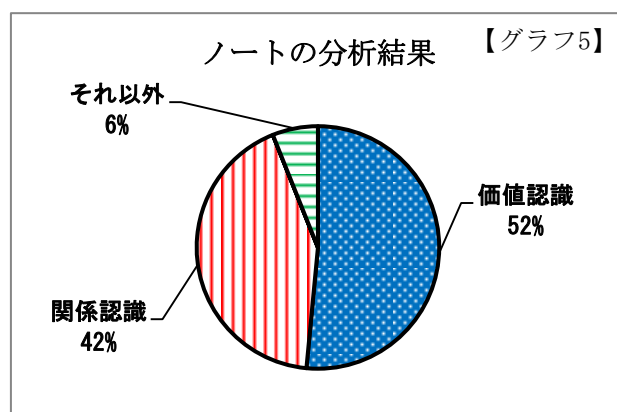
	評価規準	期待される子どもの記述
事実認識	心の状態により体調が変化する、または、体調により心の状態が変化する、のどちらかを理解している。	心の状態で体調が変化する、または、体調により心の状態が変化する、のどちらかに関する記述がある。
関係認識	心と体が相互に影響し合っていることを理解している。	「心と体はつながっている」「心と体は関係がある」のように、相互の影響を理解した記述がある。
価値認識	心と体どちらも整える必要性を理解している。または、自己の経験を想起して心と体が影響し合っていることを理解している。	心と体の「どちらも」といった記述がある。または、「以前、そんなことがあった。」のように自己の経験と照らし合わせた記述がある。

【資料7】 価値認識が表出したノート例

体調がいいときは、体だけがいいのではなくて、心と体のどちらともが発達しているから体調はいいことがわかるりました。なのでどちらかを成長させようと思ひました。

【資料8】 関係認識が表出したノート例

心と体、どちらも健康が大それたいいと分かりました。心と体はつながっていて、悲しい時はいつもできていたことができなくなったりするから、心と体はつながっている関係しているということが分かりました。



【資料7】【資料8】は学習後のノートを【表8】により分類したものの例である。【資料7】からは、心と体は相互に影響し合っていることへの理解と、そのためにも成長させなければならないことを理解していることが分かるため価値認識で考えが表出している。【資料8】は、心と体は相互に影響し合っていることを理解していることが分かるため関係認識で考えを表出している。

評価規準を基に子どものノートの記述を評価し割合を表したものが【グラフ5】である。価値認識で考えを表出している子どもが52%、関係認識で考えを表出している子どもが42%となっている。それ以外となっているのは、本時内容とは無関係と思われる記述である。また、本時の学習においては、事実認識での表出はなかった。

#### (5) 考察

##### ① 「知る」段階

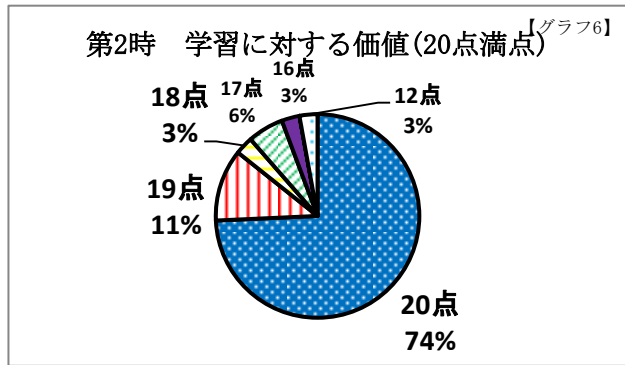
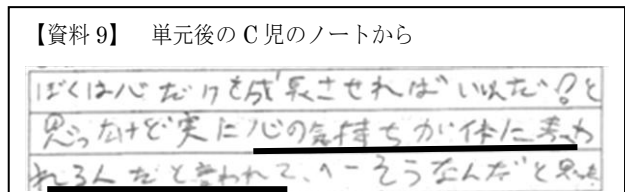
子どもが経験したことがある運動会のかげっこ場面の絵を提示して、その経験を想起させて交流させたことで「心の状態によって体に影響がある」ことを理解することができたと考える。その根拠として、話し合いの中で p19 c 22 の児童の発言「緊張していたからスタートダッシュが遅れた」が挙げられる。この段階においては、だれもが経験している運動会のスタートという緊張場面を想起させ、場面の主人公の心情を推し量らせることで、新たな知識として「心と体は関係がある」ことを理解することができたと考える。

② 「関係付ける」段階

体験を振り返って交流したことで「心と体の相互の影響」を関係付けて理解することができたと考えられる。その根拠として、p20 c23「悲しい気持ちになった。笑いたくても笑えない」から c27「体調が悪いときは治るかな、と不安な気持ちになる」の発言が挙げられる。ノートに提示された場面と類似する心情の体験を想起することで、心と体が影響し合っていることをとらえることができている。また、抽出児のノートにも心の状態と体の調子、体の調子と心の状態の双方向の影響が記されていることから体験を活用することで心と体の相互の影響について理解できたことが分かる。さらに、ゲームを行ったことは「心」と「体」を関係付けて理解することに有効であった。その根拠として、p20の c28「心と体は、やっぱりつながっていた」という発言があったことが挙げられる。この発言から、経験を想起し交流した結果得られた「心と体は影響し合っている」という知識を確かめることができていたのが分かる。ほぼすべての児童がゲームの後で脈拍の上昇が見られ、落ち着いた状態と緊張した状態での脈拍の違いから、体と心は影響し合っていることを認識することができた。特に B 児 C 児は、回数が増えたことをグループで報告 (p18: B 児・C 児の反応) し合うなど、関係付けて理解したことを身近なこととしてとらえることができたといえる。関係付ける段階において、場面に当てはめて経験を振り返り、ゲームを用いた交流を行ったことで「心」と「体」を関係付けて理解することができた。

③ 「解る」段階

養護教諭の話聞く場面を設定したことは、子どもが心と体に関係付けてとらえることに有効であり、どちらも整える必要があることを理解する上で効果があったと考える。「心」と「体」を関係付けてとらえることに有効であったと考えた根拠として、【資料 9】が挙げられる。【資料 9】は単元後に「養護教諭の話でもっとも印象に残ったものは何ですか」という質問に回答した C 児の記述である。本時に、養護教諭が話した内容を記述しており、C 児にとって本時の養護教諭の話が「心」と「体」を関係付けてとらえることに効果があったと言える。また、p21 抽出児のノートの振り返りには「心と体がつながっていることをはじめて知りました。」(A 児)「心と体のつながりなんて考えたことが全然なかったので、」(B 児)「うれしかったらとびはねたりしているからです。」(C 児)とある。



どの抽出児も心と体の関係についてとらえることができています。これは、「関係付ける」段階までに、子どもが「心」と「体」の影響について理解していたため、養護教諭の話した「心の働きと体のつながり」を容易にとらえることができたことの結果だと考える。これらのことから、養護教諭の話聞く場面を設定したことは、子どもが心と体に関係付けて理解することに有効であったと言える。

「健康のために、どちらも整える必要があること」を理解する上で効果があったと考えた根拠として、価値認識で考えを表出している子どもが 52%【グラフ 5】いることが挙げられる。また、学習の価値をどれだけ感じる事ができたかを評価した【グラフ 6】では、88%の児童が 18 点以上としているこ

とから、学習した事柄に対して高い価値を感じていることが分かる。これらのことから、養護教諭の話は関係付ける段階までの内容を強化する効果は十分にあると考える。しかし、すべての児童が「どちらも整える必要がある」ことを価値付けるには至っていない。それは抽出児の学習を振り返るノートの記述から分かる。どの児童も心と体の関係についての記述であり、「健康のためには心と体のどちらもバランスよく成長させる必要がある」ことを理解した姿としては表出されていない。これは、「心と体をどちらも整える必要性」についての養護教諭の話が、「関係付ける」段階までの子どもの「心と体は影響し合っている」という理解との間にズレがあったことが原因であると考えられる。

今後、すべての児童を価値認識まで高めるには、「関係付ける」段階までに、心と体をどちらも整えることが健康につながっている等の経験を想起することが有効であると考えられる。



4 第3時 「不安や悩みへの対処」

(1) 目指す子どもの姿

ア	不安や悩み適切に対処することが <b>心の健康とかかわることを理解</b> することができる。(知識)
イ	人にあった不安や悩みへの対処の仕方について、人の特徴と関係付けて考えることができる。(思考・判断)
ウ	不安や悩みへの対処について学習することの <b>価値を感じ</b> たり、関心をもったりして、意欲的に学習に取り組んだりすることができる。(関心・意欲・態度)

(2) 各段階のねらいと手立て

① 「知る」段階

「不安や悩み」「不安や悩みへの対処法」は多様にあることを理解させるために、付箋紙に考えを記入させ、板書で視覚化した。



② 「関係付ける」段階



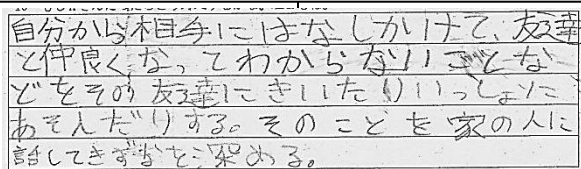
「不安や悩みへの対処」と「人の特徴」を関係付けて理解させるために、もし自分がAさんであったらどのように対処するかを考えさせ、交流させた。


③ 「解る」段階

不安や悩みへ適切に対処するために様々な体験をすることは心の発達のために大切であることを理解させるために、養護教諭から不安や悩みへどのように対処しているか話を聞く場面を設定した。

(3) 授業展開

段階	学習活動(◆) 認識の過程(◇)	子どもの姿(全体・抽出児)		
		A児	B児	C児
知る	◆悩みや不安を付箋紙に記入する。 ◇悩みや不安が多種多様にあることを理解する。	めあて 悩みや不安について考えよう		
		<p>《付箋紙に考えを記入し、不安や悩みを出し合う児童》</p>  <p>c29：怒られたときの悩み。 c30：習い事の悩み。 c31：家族の悩み。 c32：勉強の悩み。 c33：学校の悩み。 等と次々に発言し、付箋紙に記入していった。</p> <p><b>不安や悩みが多様にあることを理解している。</b></p> <p>《付箋紙を黒板に貼り、多様性を視覚化した》</p>  <p>c34：いろいろな人がいろいろなことで悩んでいるのがわかります。 T：今の考えに納得の人はどのくらいいますか。 c35：全員が挙手。 c36：こんなにたくさん悩みがあるとは思いませんでした。</p>		

知る	<p>◆付箋紙に考えを記入し、悩みや不安への対処を出し合う。</p> <p>◇悩みや不安への対処が多種多様にあることを理解する。</p>	<p>A 児、B 児、C 児の反応</p>		
		<p>・グループ活動では、4 枚の付箋紙に記入していた。全体交流では、発言者の方を向いて発言を聞いていた。</p>	<p>・グループ活動では、付箋紙に 3 枚記入していた。全体交流では挙手したり、発言に返事を返したりしていた。</p>	<p>・グループ活動では、4 枚の付箋紙に記入していた。全体交流では、発言者の方を向いて発言を聞いていた。</p>
		<p>《付箋紙を黒板に貼り多様性を視覚化した》</p>		
			<p>c37: 運動をする。遊ぶ。お風呂に入る。  c38: 対処の仕方たくさんある。  c39: 不安や悩みに対処する方がたくさんありそう。</p>	
		<p><b>対処の仕方が多様にあることを理解している。</b></p>		
		<p>A 児、B 児、C 児の反応</p>		
		<p>・グループ活動では、3 枚の付箋紙に記入していた。全体交流では、挙手していた。</p>	<p>・グループ活動では、3 枚の付箋紙に記入していた。全体交流では、挙手していた。</p>	<p>・グループ活動では、5 枚の付箋紙に記入していた。全体交流では挙手して発言した。</p>
関係付ける	<p>◆A さんの特徴を決定し、自分が A さんだったらどのように対処するか出し合う。</p> <p>◇不安や悩みへの対処と人の特徴を関係付けて理解する。</p>	<p>《A さんだったらどうするか、全体での交流の様子》</p>		
			<p>勉強に対する不安を抱える A さん。A さんの得意なこと、苦手なことを選択肢から選ばせ、自分であったらどう対処するかを考えさせた。</p>	
		<p><b>対処の仕方と人の特徴を関係付けて理解している。</b></p>		
		<p>c40: A さんの得意なことは運動で苦手なことは勉強です。もし A さんだったら運動が好きだから運動をして気持ちをすっきりさせます。  c41: 得意なことをすると気持ちがすっきりするからその対処法はいいと思います。  T: A さんが悩んでいることはみんな同じなのに、対処の方法がちがうのはなぜでしょうか。  c42: ほかのグループとは得意なことがちがうから、対処の方法がちがいます。その人の得意なことで対処法が決まると思います。</p>		
		<p>A 児、B 児、C 児の反応(ノートの記述から)</p>		
		<p>A 児</p> 	<p>得意なことは「おしゃべり」という理由で左のような記述になった。人の特徴と対処法を関係付けて考えている。</p>	

		<p>B児 ぼくは、こんなやみをかかえていたから料理を作るのがいいし、おいしくできた時はとても嬉しいのでぼくは料理を作ります。</p>	<p>得意なことは「料理」という理由で左のような記述になった。人の特徴と対処法を関係付けて考えている。</p>
		<p>C児 もし人だ、たの料理をします自分が好きな料理を食べれば元気がでくるからです。それに口をつけると自分で味が塩をたくさんくいれたいなくしたりしています。</p>	<p>得意なことは「料理」という理由で左のような記述になった。人の特徴と対処法を関係付けて考えている。</p>
<p>解る</p>	<p>◆養護教諭、教師の話の話を聞き、学習をまとめる。 ◇不安や悩みへ対処した経験を価値付ける。</p>	<p>養護教諭の話(要旨)</p>  <p>教師の話(要旨)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>不安や悩みは、大人でも子どもでも、<b>だれにでもあること</b>。</li> <li>人を傷つけたり悲しませたりしない方法で不安や悩みに対処すること。</li> <li>気持ちを切り替えるために<b>実践していること</b>。</li> <li>一人で対処できないときは、<b>大人に相談する</b>などすること。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>不安や悩みに気づき、対処することも心を成長させる大切な経験であること。</li> <li>知らず知らずのうちに、対処する方法を身に付けていること。</li> <li>いろいろな方法で対処する経験をすることも心の成長には大切であること。</li> </ul>	
		<p>A児、B児、C児の反応(ノートの記述から)</p>	
		<p>A児 今日の学習でわたしは友達もいろいろなやみをかかえているけれどそれなりの対処法があることがわかりました。そして自分や相手をまもつけないようにすることもわかりました。</p>	<p>悩みはだれにでもあることを認識している。養護教諭の話から新たなことを認識している。</p>
		<p>B児 ぼくはみんなのかわいいしょうちでなるほどと思っただけはたくさんありましたが一番なるほど思っただけは辛いことをするので理由は、ぼくは自然からいじわるなことをしていたのでたいがいなるほど思いました。</p>	<p>成長とともに悩みや不安への対処を身に付けていることを認識している。自分の成長を価値付けている。</p>
		<p>C児 今日で人にたくさん不安や悩みがありそのなにはほうをいじるあると気づきました。ぼくは今まで音楽をきくといい方法でかやたことはなからたけい、今新しいいい方法でやってみようと思います。</p>	<p>不安や悩みへ対処してきたことを振り返り、ちがう方法で対処していこうとしている。</p>



(4) 授業後のノート分析の結果

認知的側面における価値認識までの過程を【表9】のように整理し、ノートの記述を分析した。

【表9】 第3時の評価規準と期待する児童の記述

	評価規準	期待される子どもの記述
事実認識	不安や悩み、不安や悩みへの対処は多様であることを理解している。	「不安や悩みはたくさんあることが分かった」「対処の仕方がたくさんあることが分かった。」などとそれぞれを認識した記述がある。
関係認識	その人に合った不安や悩みへの対処法があることを理解している。	「人によって対処の仕方がちがうことが分かった」などと人の特徴と対処を関連して理解している記述がある。
価値認識	不安や悩みに適切に対処することが心の健康とかかわることを理解している。または、対処してきたことが心の状態を安定させてきたことを理解している。	適切に対処することで心の状態が安定したことを、自己の経験に基づいて記述している。または、心を安定させる場面があれば学んだことを基に対処していこうとする記述がある。

【資料10】 価値認識で表出した児童のノート例

わたしは、まわり先生が言った答えは出してもらわなくていいから友達と話すことです。向かえをわすれたとき、友達が受け入れてくれるだけでわたしもすかとなります。たかななるほどと思いました。

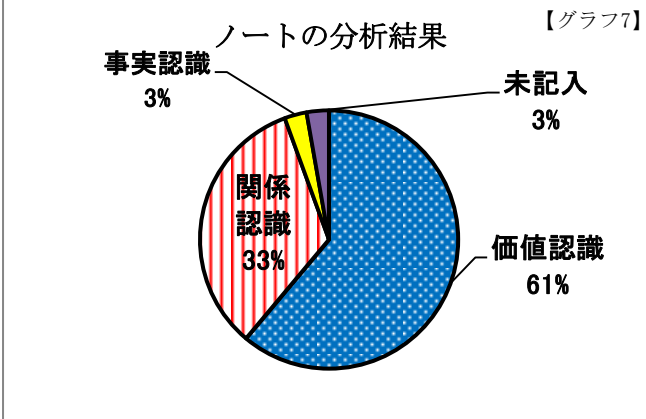
【資料11】 関係認識で表出した児童のノート例

人には、こじんこじん、ずきなこと、きらいなことがあるから、小西や不安があるときは、ぼくは、好きなこと、かえ、やけてそこやります。

【資料12】 事実認識で表出した児童のノート例

一人一人に悩みがあり、そのいしよ、うしかしたもろが、ことかあかりました。なやみやいしよの数が増えおどろきました。

【資料10】～【資料12】は学習後のノートを【表9】により分類したものの例である。【資料10】からは、自分が行っていた対処法は心の状態を安定させるために行っていたことが理解できているため価値認識で考えを表出したものである。【資料11】は、人に合った対処法があることを理解している記述があるため、関係認識で考えを表出したものである。【資料12】は、悩みや対処への多様性を理解している記述があるため事実認識で考えを表出している。



【グラフ7】は、【表9】を基に子どものノートの記述を評価し認識の段階の割合を表したものである。価値認識で考えを表出した児童が61%、関係認識で考えを表出した児童が33%、事実認識で表出した児童が3%である。

(5) 考察

① 「知る」段階

経験を想起し付箋紙に記入したことで「不安や悩みは多様にあること」「不安や悩みへの対処は多様にあること」を理解することができたと考える。その根拠として、p25のc34「いろいろな人がいろいろなことで悩んでいるのがわかります。」c36「こんなにたくさん悩み事があるとは思いませんでした」の発言が挙げられる。特にc36「こんなにたくさん」の発言からは児童の予想よりもたくさんの悩みがあったことに対する驚きが表れており、付箋紙に書き出したものを黒板に貼り、視覚でとらえられるようにし

たことで不安や悩みの多様性を認識することができたと考える。さらに、p26のc38「対処の仕方<sup>も</sup>」から、不安や悩みの多様性と同様に対処の仕方についても、その多様性をとらえることができたことが分かる。c39「たくさんありそう」からも、対処の仕方の多様性について認識することができたと考える。この段階では、子どもの経験を基に、考えられる悩みや不安、その対処法を付箋紙に書き出したことで、子どもは「不安や悩みは多様にある」「対処法は多様にある」ことを理解することができたと考える。

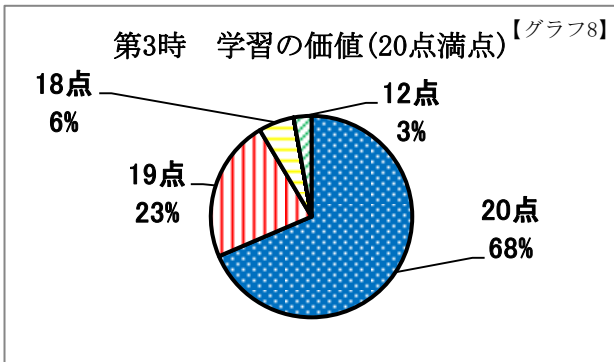
## ② 「関係付ける」段階

**Aさんの特徴を決定し、自分であったらどのように対処するかを考えさせたことで、「対処の方法」と「その人の特徴」を関係付けて理解することができた**と考える。その根拠として、p26のc40「得意なことは運動。運動をして気持ちをすっきりさせる。」という発言やc41「得意なことをするとすっきりする」という発言が挙げられる。どちらも、得意なことを行うことで気持ちを切り替えることができるということを根拠として対処法を考えることができた。また、c42「得意なことがちがうから」の発言からは、人に合った対処法を行うことが効果的であることを認識できていることが分かる。抽出児のノートからも、得意なことで対処していくよさが記されている。特にB児は「料理を作ると楽しいし、おいしくできたときはとってもうれしいのでぼくは料理を作ります。」と、得意なことをするとどのような気持ちになるのかについて経験を基に記述している。「料理が好き」という人の特徴と、「知る」段階で理解した「対処の仕方の多様性」を関係付けてとらえることができていた。この段階において、Aさんの特徴を決定し自分がAさんであったらどのように対処するかを考えさせることで、「対処の方法」と「その人の特徴」を関係付けて理解することができたと考える。

## ③ 「解る」段階

【資料13】 学習後の児童のノート

自分たちの悩みや不安はいろいろあるけど、対処法がいろいろと分かりました。みんなの意見を聞いて、対処法が人たちにきいてもらって、スッキリさせて、なやみや不安をかいけつしたいです。



**養護教諭・教師の話を書く場面を設定したことで、不安や悩みへ適切に対処していく必要性について経験を踏まえて理解することができた**と考える。その根拠として、価値認識の段階で考えを表出した子どもが61%(p28:【グラフ7】)いることが挙げられる。抽出児であるB児はノートにp27「自然とやって得意なことをしていたので」と記述している。これは、教師の話によって自分を振り返り、本時の学習内容である「自分に合った方法で対処すること」について経験を基に理解している姿であると言える。【資料13】は学習後の児童のノートである。この児童は養護教諭の「気持ちを切り替えるために」という内容を理解し、「スッキリさせる」という表現で対処の意味を理解することができた。さらに、ノートの記述として表現することはできないが、学習に対する価値を感じた児童が97%【グラフ8】いることから、学習内容の価値を感じさせることができた。これらのことから、この段階において養護教諭の話・教師の話を書く場面を設定したことは不安や悩みへ適

を感じた児童が97%【グラフ8】いることから、学習内容の価値を感じさせることができた。これらのことから、この段階において養護教諭の話・教師の話を書く場面を設定したことは不安や悩みへ適

切に対処することが健康につながるということを理解したり、心を安定させるために様々な方法で対処していこうとする意欲を高めたりしていく上で効果があったといえる。今後、関係認識で留まっている児童を価値認識に高めるには、養護教諭に「児童の経験を価値付ける」という立場から話してもらうこと、映像資料などを提示しながら、児童に対処した時の気持ちを問いかけるなどして、経験を想起させながら教師が話をすること、価値付けた事柄を交流することなどが有効なのではないかと考える。

## 5 事後調査

### (1) 抽出児の変容

保健学習に対する意識を調査するために保健授業の教授—学習過程評価票を用いた総括的評価を行い、「学習中の協力」「学習に対する価値」「学習に対する意欲」を事前と事後で比較した。

<p style="text-align: center;">A児の診断的評価と総括的評価の比較</p> <p style="text-align: right;">【グラフ9】</p> <p>事前 (斜線) 事後 (点線)</p>	<p>「協力」「価値」に関する項目が5点満点となった。どの項目も、上がっており全体的な向上が見られた。</p>
<p style="text-align: center;">B児の診断的評価と総括的評価の比較</p> <p style="text-align: right;">【グラフ10】</p> <p>事前 (斜線) 事後 (点線)</p>	<p>「価値」に関する項目が事前、事後ともに5点満点となった。「意欲」に関する項目が下がっている。「協力」「価値」に関する項目は変化なし。</p>
<p style="text-align: center;">C児の診断的評価と総括的評価の比較</p> <p style="text-align: right;">【グラフ11】</p> <p>事前 (斜線) 事後 (点線)</p>	<p>「協力」は0.25、「価値」は0.7、「意欲」は0.85数値が上がっている。どの項目も数値が上がっており、全体的な向上が見られた。</p>

### 形成的評価の推移

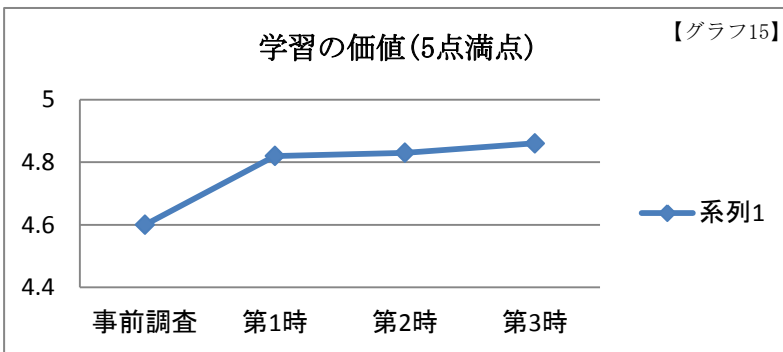
<p style="text-align: center;">協力</p> <p style="text-align: right;">【グラフ12】</p> <p>● A児 (点線) ■ B児 (斜線) ▲ C児 (点線)</p>	<p>「協力」に関する項目では、A児は5点満点で推移し、B児は第2時が5点満点。C児は、時数を重ねるごとに上昇している。</p>
<p style="text-align: center;">学習の価値</p> <p style="text-align: right;">【グラフ13】</p> <p>● A児 (点線) ■ B児 (斜線) ▲ C児 (点線)</p>	<p>「価値」に関する項目では、A児、B児は5点満点で変化なく推移し、C児は第2時に下がり、第3時に基の水準まで戻る。全体的に高い傾向にある。</p>
<p style="text-align: center;">学習への意欲</p> <p style="text-align: right;">【グラフ14】</p> <p>● A児 (点線) ■ B児 (斜線) ▲ C児 (点線)</p>	<p>「意欲」に関する項目では、A児、B児は高い水準で推移した。C児は第2時が最も低くなった。C児はグループでの活動を取り入れると高い傾向になった。</p>

【表 10】 心を成長させる方法について

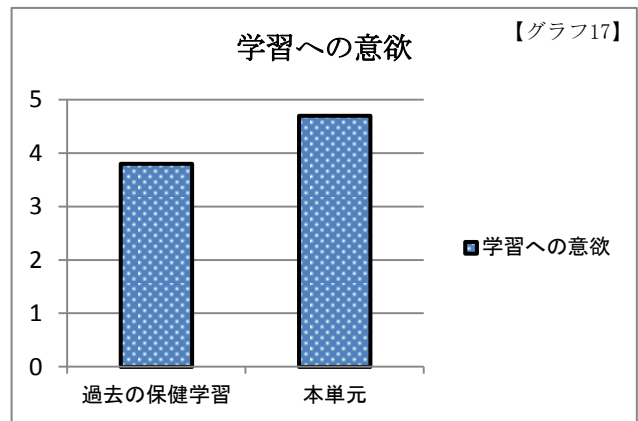
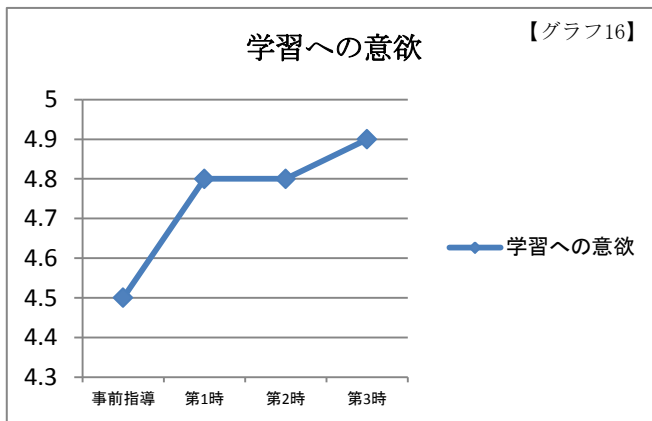
	事前		事後	回答
A 児	知らない	➡	知っている	第 1 時と第 2 時の学習内容を記述
B 児	何となく知っている		知っている	第 1 時の学習内容を記述
C 児	何となく知っている		知っている	第 1 時～3 時の学習内容を記述

「心を成長させる方法を知っているか」について事前指導と事後指導で比較を行った。結果は【表 10】のようであった。抽出児 3 人とも「知っている」という回答になっており、本単元での学習内容を記述していた。

(2) 学級全体の変容



【グラフ 15】は保健授業の教授－学習過程評価票における「保健学習への価値」に関する回答の学級平均を出したものである。どの時間も 95%以上の点数を得ることができている(事前調査は過去の保健学習を指す)。このため、子どもは、**学んだことに対して高い価値を感じたことが分かる。**



【グラフ 16】は学習への意欲に関する項目の学級平均の推移である。いずれも高い数値で推移しているのが分かる。第 3 時には 5 点満点中 4.9 点と大変に**高い意欲で学習に取り組めた**ことが分かる。【グラフ 17】は、過去の保健学習への意欲と本単元での意欲を比較したものである。過去の保健学習と比べても、1 ポイント数値が上昇しており、高い意欲をもって学習に取り組めたといえる。

【資料 14】は学習後の児童の感想である。【資料 14】からは健康で過ごすことの価値を感じ、自らが健康に過ごすために学んだということを理解した姿である。

【資料 14】 単元後の児童の感想

ぼくが**おと元気でいたいのは、まず"回り"の人にめいわくをかけたらい、ぼくも元気でいたほうが楽しいからであ。そして、気持ちも切りかえたりする方法があるのて、それをしたか、ぼくも楽しくいれるし、回りの人にもハッピーされたり、めいわくが、かからない、からです。それに、いやなこと"おちこ**



## VII 全体考察

下の【表 11】は、検証授業について、それぞれの時間の考察を基に、その結果をまとめたものである。全体考察については、この表を基に行う。

【表 11】 考察のまとめ

段階	第1時	第2時	第3時
「知る」段階	泣いている幼児の絵を見て経験を基に交流したり、心の働きについて教師から説明を受け、カードを分類したりしたことで「心の発達」「心の働き」について理解することができた。	心の状態が体に影響している絵を見て経験を基に交流したことで「心の状態によって体に影響があること」について理解することができた。	不安や悩み、それへの対処について経験を想起して付箋紙に記入したことで「不安や悩み」「対処法」の多様性を理解することができた。
「関係付ける」段階	カードを分類した理由を交流したことで、心の働きについての理解はできたが、「自分の心が経験を積むことによって発達したこと」と「心の働き」を関係付けて理解することは不十分であった。	体験を振り返って交流したり、ゲームをしたりしたことで、「体」と「心」が相互に影響し合っていることを理解することができた。	もし、自分がAさんだったらどのように対処するか考え交流したことで、人に合った方法で対処することを理解することができた。
「解る」段階	養護教諭の話の聞いたり写真を見たりして学習をまとめたことは、「心の発達」と「心の働き」を関係付ける上で効果があった。しかし、関係認識したことを、経験に基づいて理解することは不十分であった。	養護教諭の話の聞いて学習をまとめたことは、「心」と「体」の相互の影響を関係付ける上で効果があった。しかし、よりよい成長のために心と体のどちらも整える必要性を理解することは不十分であった。	養護教諭と教師から話を聞き学習をまとめたことで、経験を基に自分に合った方法で不安や悩みへ対処することの必要性、対処する経験をする必要性を理解することができた。

### 1 段階について

1 単位時間の学習を、「知る」「関係付ける」「解る」の3段階で構成したことは、子どもが学習内容に対する認識を高める上で有効であったと考える。その根拠として、【表 11】の第1時と第3時の比較が挙げられる。

第1時は「関係付ける」段階において、子どもは自分の経験と心の働きを関係付けて理解することが不十分であった。しかし、「解る」段階において養護教諭や教師から「心の成長と子どもの経験とのつながり」について話を聞く場面を設定したことで、理解が深まり「関係付ける」段階までのねらいを達成することができた。(p15 グラフ 3: 関係認識以上での表出が 77%) さらに、40%の子どもが価値認識で考えを表出することができた。しかし、価値認識での表出は半数にも至らなかった。そのため、子どもの認識を補う効果はあったと言えるが、多くの子どもを価値認識まで高めるには課題がある。

第3時では、それぞれの段階においてねらいを達成することができた。「関係付ける」段階では「知る」段階で理解した内容を関係付けて理解し、「解る」段階では、それまでに認識した「自分に合った方法で対処すること」について経験を踏まえて理解することで健康の大切さを実感することができている。(p28～p30 第3時考察)つまり、子どもは、基本的事項を理解し、それらを関係付けてとらえることで対象に関する全体像を把握し、関係付けた内容に自分の経験を重ね合わせることで、その内容を価値付け、健康の大切さを実感することができた。

【資料15・16】はB児C児の「関係付ける」段階「価値付ける」段階でのノートの記述である。B児は、「関係付ける」段階で「料理を作ると楽しい」と人の気持ちと対処を関係付け、さらに「価値付ける」段階では「ぼくは自然とかってに」と自分の経験を振り返って理解していることが分かる。さらに、C児は「関係付ける」段階で「料理を食べれば元気が出る」と対処の結果と人の気持ちがどのようになるかを関係付け、さらに「価値付ける」段階では「今後いろんな方法でやってみようと思います。」とこれから自分が経験するであろうことを踏まえて理解することができている。これら児童の記述からは、「不安や悩みへ対処すること」と「人」を関係付けて認識し、さらに、自分の経験を振り返ったり、これからの自分に当てはめて考えたりして、価値付けて認識していることが分かる。このことから、子どもが、「不安や悩みへ対処すること」と「人」を関係付けて認識した後に、経験を振り返って価値付けていると言える。このように認識が高まっているのは、認識の過程に応じて1単位時間を「知る」「関係付ける」「解る」の3段階で構成し、各段階のねらいを達成することができていたためである。

さらに【資料17】は、第3時後の児童のノートである。この児童は、「知る」段階で理解した「不安はたくさんある」とことと対処法を関係付けている。さらに「なので不安になったら…」という表現で「関係付ける」段階で考え、理解したことを価値付けることができている。これは、対象について知る「事実認識」を行い、対象同士を関係付ける「関係認識」をし、経験を価値付ける「価値認識」という認識の過程に応じて学習を進めた成果であると考えられる。

第1時と第3時を比較することで、学習段階のねらいを確実に達成することが児童の認識を高めることにつながると分かった。

【資料15】 第3時 B児のノート 「関係付ける」段階

ぼくは、こんなやみをかかえていたから料理を作るのがいいし、おいしくできた時はとても嬉しいのでぼくは料理を作ります。

第3時 B児のノート 「価値付ける」段階

ぼくはみんなのいいしょう方でなるほどと思ったのはよく思いましたが一番なるほど思ったのがいいがことをするで理由は、ぼくは自然とかってにいいことをしていたからなるほど思いました。

【資料16】 第3時 C児のノート 「関係付ける」段階

私も食べた。その料理をします自分が好きな料理を食べれば元気がでるからです。それこそ食べても自分でできるから塩をたくさんなくしてあります。

第3時 C児のノート 「価値付ける」段階

今日で人に比べて不安や悩みが少なくていいところもあると気づきました。ぼくは今まで音楽をきくという方法でしかやることがなかったけれど、今後いろいろな方法でやってみようと思います。

【資料17】 第3時後の児童のノート

不安はたくさんあるけど、それなりに、たいていの仕方でもたくさんあるということがわかりました。なので、不安になったら、ただそれかきりてもらうくらいをおちつかせたりすることを、おぼえておきたいと思います。

P32【グラフ 15】は保健授業の教授—学習過程評価票における「学習の価値」に関する回答の学級平均の推移を表したものである。実践授業では、4.8 点以上で推移しており、児童が学習したことに対する価値を感じることができたと言える。これは、各時間で児童の経験を基に学習内容を理解する価値認識を目指して指導を行った成果である。このことから、児童が学習に対する価値を感じる上でも 1 単位時間を 3 段階で構成したことが有効であったと考える。

これらのことから、1 単位時間の学習を認識の過程に応じて「知る」「関係付ける」「解る」の 3 段階で構成したことは子どもが認識を高めていく上で有効であり、各段階のねらいを達成していくことで健康の大切さを実感する子どもを育てることができると言える。

また、学習を 3 段階で構成したことで次のような効果も見られた。【資料 18】は学習後の児童の感想である。この児童は「風邪を引かないために心の状態を安定させよう」と考えており、その方策として「イライラが消える」と表現している。風邪を引かないようにするために心を安定させることは、第 2 時の学習についての表記である。また、「イライラが消える」については、第 3 時の学習についての表記である。このような理解ができたのは、「価値付ける」活動により、毎時間経験を価値付け、学習内容を自分のこととしてとらえた結果である。そのために、この児童は、第 2 時、第 3 時の学習内容を「健康でいるために」という視点から価値付けることができたと考える。

このことから、1 単位時間の学習を「知る」「関係付ける」「解る」の 3 段階で構成したことは、各時間の学習内容を関係付けて理解する上でも有効であった。

【資料 18】 学習後の児童の感想

私は風邪を引かないために心の状態を安定させよう  
 と思った。イライラが消えるようにするために心を安定させることは、第 2 時の学習についての表記である。また、「イライラが消える」については、第 3 時の学習についての表記である。このような理解ができたのは、「価値付ける」活動により、毎時間経験を価値付け、学習内容を自分のこととしてとらえた結果である。そのために、この児童は、第 2 時、第 3 時の学習内容を「健康でいるために」という視点から価値付けることができたと考える。

## 2 活動について

### (1) 「知る」「関係付ける」活動について

どちらの活動とも、**子どもの経験や考えを十分に想起させて活用することが、認識を高めることに有効である**と考える。その根拠として、【表 11】第 1 時と第 2 時の活動の比較が挙げられる。第 1 時では、教師から提示されたカードの分類によって「心の働き」を理解することができた。【写真 2】はカードを分類している子どもの様子である。黒板の説明と比較しながらカードを分類しているが、自分の経験を表出することが十分とは言えない。そのため、経験に基づいた理解を図ることは不十分であり、第 1 時では関係認識以上で考えを表出できた児童は 77% (p 15 グラフ 3、関係認識+価値認識) であった。第 2 時では、【資料 19】のように、子ども一人一人が自分の考えや経験を十分に表出することができている。【資料 19】は、だれもが経験したことのある「プレゼントをもらったとき」「大切なものをなくしたとき」といった場面を提示し、そのときの自分の気持ちを記述させたものである。「関係付ける」活動では、その記



その根拠として、【表 11】第 1 時と第 2 時の活動の比較が挙げられる。第 1 時では、教師から提示されたカードの分類によって「心の働き」を理解することができた。【写真 2】はカードを分類している子どもの様子である。黒板の説明と比較しながらカードを分類しているが、自分の経験を表出することが十分とは言えない。そのため、経験に基づいた理解を図ることは不十分であり、第 1 時では関係認識以上で考えを表出できた児童は 77% (p 15 グラフ 3、関係認識+価値認識) であった。第 2 時では、【資料 19】のように、子ども一人一人が自分の考えや経験を十分に表出することができている。【資料 19】は、だれもが経験したことのある「プレゼントをもらったとき」「大切なものをなくしたとき」といった場面を提示し、そのときの自分の気持ちを記述させたものである。「関係付ける」活動では、その記

述を基に交流を行った。自分の記述を基に交流したことで、学習したことを自分のこととしてとらえることができ、関係付けて理解することができたと考える。その結果、第2時では、関係認識以上で考えを表出することができた児童が94%(p22 グラフ5、関係認識+価値認識)となった。これらのことから、子どもの経験や考えを十分に表出させて活用することが、認識を高めることに有効であると言える。

P32【グラフ16】は保健授業の教授—学習過程評価票における「学習への意欲」に関する回答の学級平均の推移である。実践授業では、4.8ポイント以上で推移しており、児童が高い意欲で学習に取り組めたことが分かる。これは、児童の経験や学習の中で理解したことを活用した活動を仕組んだために、どの児童も主体的に参加することができたことの表れであると考えられる。このことから、知識を活用する活動を仕組んだことは、児童の学習に対する意欲を高める上で効果があったと言える。

【資料19】 第2時の児童のノート

わたしは、へいおはあちゃんか死んだとき、心は悲しくて、体は、目からなみだがでたり、体がちよっときつかったです。

わたしは、プレゼントを持ち、たら、心がとてもうれしくて、体が、とひはねたりしてはしゃいでいました。うれしくてないで

わたしは、インフルエンザになってねていた時、心は、はやく元気になってみんなとあそびたくて、体は、きつくて、たるく、空にう

体のちよっしかりいとき、心は、うきうきして、スッパリ、さっぱりして、体が、いきたい所たうこいいてくれました。

## (2) 「価値付ける活動」について

養護教諭や教師の話では、「関係付ける」段階までに子どもが認識したことについて、**子どもの経験を価値付けることが、認識を高める上で有効であったと考える**。その根拠として、【表11】第2時と第3時の「解る」段階の比較が挙げられる。第2時において養護教諭は「心の働きと体の状態が影響し合っていること」「心と体のどちらも整える必要性」について話している。「心の働きと体の状態が影響し合っていること」については、第2時の「関係付ける」段階の内容をなぞっているが、養護教諭の話聞くまで「心と体のどちらも整える必要性」について、子どもは認識していない。そのため、経験に基づいて心と体を整える必要性を理解することが不十分であったと考える。それは、第2時において、価値認識で考えを表出することができた児童が52%(p22 グラフ5)であったことから分かる。一方、第3時に養護教諭は「不安や悩みはだれにでもあること」「傷つけない方法で対処すること」「養護教諭自身が実践していること」について大人も同様であるという立場から話した。これは、第3時に子どもが認識した「悩みや不安・対処法の多様性」「自分に合った方法で対処すること」と同様の内容である。そのため、【資料20】のように「大人にも子どもにも悩みがある」ことを理解することができた。また、大人の立場から話をすることで、p26 学習の振り返りのC児の「今後いろんな方法でやってみよう」という記述のように、これから経験するであろうこととして学習したことをとらえることができ、価値認識まで高めることができた。また、この児童だけではなく、自分の経験としてとらえることができた児童が61%(p28 グラフ7 価値認識)いることから、第3時における価値付ける活動が有効であったと言える。これらのことから、「関係付ける」段階までに子どもが認識したことについて、認識の過程と同様の内容を話すことが、子どもが認識を高める上で有効であったと言える。しかし、子どもの認識の過程と同様の内容を話すことで、子どもの認識を高めることはできたが、すべての児童が価値認識で考えを表出できたわけではない。今後、すべての児童が価値認識で考えを表出できるようにするには、

【資料20】 第3時後の児童のノート

不安などを対処するには、自分の好きなことをするとおねがひスーとなるんだなあと知り大人にも子どもにもなやみや不安はあることが今日わかりました。

これは、第3時に子どもが認識した「悩みや不安・対処法の多様性」「自分に合った方法で対処すること」と同様の内容である。そのため、【資料20】のように「大人にも子どもにも悩みがある」ことを理解することができた。また、大人の立場から話をすることで、p26 学習の振り返りのC児の「今後いろんな方法でやってみよう」という記述のように、これから経験するであろうこととして学習したことをとらえることができ、価値認識まで高めることができた。また、この児童だけではなく、自分の経験としてとらえることができた児童が61%(p28 グラフ7 価値認識)いることから、第3時における価値付ける活動が有効であったと言える。これらのことから、「関係付ける」段階までに子どもが認識したことについて、認識の過程と同様の内容を話すことが、子どもが認識を高める上で有効であったと言える。しかし、子どもの認識の過程と同様の内容を話すことで、子どもの認識を高めることはできたが、すべての児童が価値認識で考えを表出できたわけではない。今後、すべての児童が価値認識で考えを表出できるようにするには、

養護教諭や教師が児童の経験を価値付けて話したり、映像資料などを提示して経験を想起させながら価値付けたりすることも必要であると考えます。

以上のことから、知識の活用を位置付けた学習活動を行う際には、①子どもの経験を掘り起こして活用すること②子どもが認識したことを養護教諭や教師が確認して価値付けること、が重要であると言える。

## VIII 研究のまとめ

### 1 成果

- (1) 子どもの認識の過程に応じて1単位時間の学習を「知る」「関係付ける」「解る」の3段階で構成し、ねらいを設定することで、子どもは対象を単一なものとしてとらえる事実認識、それらに関係付ける関係認識、それらの意味を価値付ける価値認識へと認識を高めることができ、健康の大切さを実感する子どもを育てることができた。さらに、単元を通して3段階の学習過程を仕組んだことで、毎時間の学習内容が価値付けられ、各時間の学習内容を関係付けて理解することにつながった。
- (2) 知識を活用する学習活動を行うことで、子どもは学習内容と自分との関係を見つめ直したり、経験に基づいて理解したりすることができ、健康の大切さを実感する子どもを育てることができるということが分かった。

### 2 課題

- (1) すべての児童が価値認識で考えを表出するには至らなかった。今後、学習内容を価値付ける「解る」段階のより有効な在り方を究明する必要がある。その方策として次の2点を挙げる。
  - ・ 養護教諭の話について、児童の認識の過程と同様の内容を話すことが有効であったが、それに加え、児童の経験を価値付けるための話の内容も加える。
  - ・ 「解る」段階においても映像資料を提示するなどし、具体的な経験を想起させ、教師が学習内容を価値付けて話す。
- (2) 単元「心の健康」のみではなく、他の単元においても健康の大切さを実感することができるよう、認識の過程を高めていく活動の在り方を究明したい。

参考・引用文献

「小学校学習指導要領解説 体育編」		文部科学省	2008
「中学校学習指導要領解説 保健体育編」		文部科学省	2009
「高等学校学習指導要領解説 保健体育編、体育編」		文部科学省	2009
「教育心理学への招待」	梶田叡一編著	ミネルヴァ書房	2006
「活用型学力を育てる授業づくり」	木原俊行 著	ミネルヴァ書房	2011
「保健科教育の基礎」	吉田瑩一郎 編	教育出版	2010
「小学校学習指導要領の解説と展開」	高橋健夫・野津有司 編著	教育出版	2008
『『学び』の構造』	佐伯胖 著	東洋館出版	1995
『『わかり方』の探究』	佐伯胖 著	東洋館出版	2004
「学ぶこと教えること」	鹿毛雅治・奈須正裕 編著	金子書房	2010
「これからの小学校保健学習」	日本学校保健会		2009
「保健授業づくり実践論」	近藤真庸 著	大修館書店	1999
「こころとからだを育てる保健学習」	野村良和・植田誠治 編著	学事出版	1998
「保健の授業づくり入門」	森昭三・和唐正勝 編著	大修館書店	2002
「体育科教育 保健授業のねらいにおける健康に生きる力と実践力の考え方」		大修館書店	2006
「教育心理学 第2版」		サイエンス社	2010
「認知心理学 4 思考」	市川伸一 編	東京大学出版会	2003